

令和7年度  
東久留米市教育委員会・公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター  
共同事業

# 川岸遺跡

## 講演会及びシンポジウム



東久留米市教育委員会  
公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター

表紙写真：川岸遺跡の環状ブロック群（北西から撮影）  
（東久留米市教育委員会蔵）

令和7年度

東久留米市教育委員会・公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター共同事業

## 『川岸遺跡講演会及びシンポジウム』

日時 令和8年2月7日(土) 9:50～17:05

会場 まろにえホール(東久留米市生涯学習センター) 東久留米市中央町2-6-23

### [開催日程]

#### 第1部 講演会(10:00～12:25)

09:50～10:00 開会挨拶

10:00～10:15 講演1 「川岸遺跡の概要」

山崎 丈(東久留米市文化財保護審議会委員)

10:15～10:55 講演2 「川岸遺跡の旧石器時代について」

飯田 茂雄(独立行政法人国立文化財機構文化財活用センター研究員)

10:55～11:05 休憩

11:05～11:45 講演3 「川岸遺跡の縄文時代について」

奈良 忠寿(学校法人自由学園最高学部教授)

11:45～12:25 講演4 「川岸遺跡の中近世について」

野本 禎司(開智国際大学准教授)

12:25～13:15 昼食休憩

#### 第2部 シンポジウム(13:15～17:00)

13:15～13:20 趣旨説明 「川岸遺跡の環状ブロック群」

尾田 識好(東京都埋蔵文化財センター)

13:20～13:45 基調講演 「環状ブロック群とは何か？」

伊藤 健(元東京都埋蔵文化財センター)

13:45～14:10 基調報告 「川岸遺跡の環状ブロック群」

佐藤 悠登(東京都埋蔵文化財センター)

14:10～14:35 発表1 「川岸遺跡の人々の生活・活動エリア」

加藤 秀之(東京都埋蔵文化財センター)

14:35～14:50 休憩

14:50～15:15 発表2 「川岸遺跡の人々が利用した石器石材」

間 直一郎(東京都埋蔵文化財センター)

15:15～15:40 発表3 「川岸遺跡の人々の石器を作る技」

塚田 清啓(東京都埋蔵文化財センター)

15:40～16:05 発表4 「川岸遺跡の人々の狩猟具」

堀 恭介(東京都埋蔵文化財センター)

16:05～16:15 休憩

16:15～17:00 シンポジウム発表者によるディスカッション

17:00～17:05 閉会挨拶

令和7年度

東久留米市教育委員会・公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター共同事業

## 『川岸遺跡講演会及びシンポジウム』開催にあたって

川岸遺跡は、東久留米市の名前の由来である市を象徴する黒目川と、市の中央部を源流とする落合川の合流地点の高台に位置する遺跡で、古来より小野殿淵と呼ばれるなど市の歴史と深く関わりのある場所として知られています。東京都の調節池建設工事計画に伴い、平成7年（1995）以降、複数回に亘り試掘調査等が実施されると、旧石器時代、縄文時代、中世～近世と複数の時代における人々の暮らしの痕跡が残されていることが明らかとなり、令和元年8月から延べ約2年5ヶ月に及ぶ大規模な発掘調査が公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センターによって実施されました。発掘調査では、旧石器時代の環状ブロック群や縄文時代前期後半の土坑墓群が見つかったほか、川岸遺跡のある旧落合村に屋敷を構えていたと記録が残る、徳川家の鷹匠頭である小野久内吉次のものと考えられる建物跡等が発見されるなど、大きな調査成果がもたらされました。

今回のイベントは、その調査成果等を普及するため、東京都埋蔵文化財センターとの共同事業として、発掘調査で見つかった各時代をテーマにした講演会と、旧石器時代の調査成果として注目を浴びる環状ブロック群についてのシンポジウムを開催する運びとなりました。

この共同事業が、郷土の歴史・文化に対する皆様の関心を高め、また文化財保護の理解を深める機会となれば幸いです。本事業の開催にあたり、講演の快諾を賜りました東久留米市文化財保護審議会の皆様、シンポジウムでご講演いただく伊藤健氏、共同事業実施の実現にあたりご協力を賜りました関係者をはじめ、ご指導・ご協力をいただきました関係機関・各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

令和8年2月7日

主催

東久留米市教育委員会

教育長 片柳 博文

令和7年度

東久留米市教育委員会・公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター共同事業

## 『川岸遺跡講演会及びシンポジウム』開催にあたって

東京都埋蔵文化財センターは、川岸遺跡の12,600 m<sup>2</sup>を対象とした大規模な発掘調査を令和元年8月から約2年半に亘り行いました。遺跡は、落合川右岸の高台に営まれた集落遺跡で、黒目川との合流点近くに位置します。調査の結果、旧石器時代、縄文時代、中近世に関わる遺構や遺物がみつかるなど、大きな成果があがっています。

旧石器時代は、立川ローム層第Ⅲ層～第Ⅸ層にかけて石器3,957点が出土したほか、第Ⅸ層からは直径約40 m～45 mはあったと想定される環状ブロック群と呼ばれる居住跡が検出され、都内随一の事例として注目されています。

縄文時代は、竪穴建物跡27軒の他、諸磯式期の土坑群がみつかっています。

中世から近世にかけては、多摩地域では貴重だったと考えられる中国産の陶磁器が出土した他、掘立柱建物跡16棟や、台地縁辺に掘られた全長約140 mの溝が検出され、徳川秀忠・家光の時に鷹匠頭として重用された小野久内吉次で知られる小野家の屋敷跡であった可能性が指摘されています。

令和6年12月に報告書が刊行されたことを契機として、東久留米市教育委員会と共催で今回還元する講演会とシンポジウムを開催することとなりました。

これらの成果が多くの人々に活用され、大地に刻まれた東京都の歴史を解明する資料となることを期待し、併せて市民の皆様の遺跡・埋蔵文化財に関する関心とご理解を深めていただくことが出来れば幸いです。

今後とも、先人の技術と基盤にある先見性・洞察力を継承し、その技術を発展させ、精緻・正確な調査を実施し、遺跡の持つ無限の情報を最大限に記録し貴重な考古資料の集積に努めていく所存です。

本日の講演会・シンポジウムの開催にあたり、午前中講師を務められる4名の先生方と午後のシンポジウムで基調講演の講師を務められる伊藤健氏をはじめ、ご協力とご指導をいただきました関係者の皆様に厚く御礼を申し上げますとともに、併せて倍旧のご協力とご教示を賜りたくお願い申し上げます。

令和8年2月7日

公益財団法人東京都教育支援機構

東京都埋蔵文化財センター

所 長 黒田 浩利

## 目 次

講演 1 「川岸遺跡の概要」	
東久留米市文化財保護審議会委員 山崎 丈	1
講演 2 「川岸遺跡の旧石器時代について」	
独立行政法人国立文化財機構文化財活用センター研究員 飯田 茂雄	3
講演 3 「川岸遺跡の縄文時代について」	
学校法人自由学園最高学部教授 奈良 忠寿	5
講演 4 「川岸遺跡の中近世について」	
開智国際大学准教授 野本 禎司	9
趣旨説明「川岸遺跡の環状ブロック群」	
東京都埋蔵文化財センター 尾田 識好	11
基調講演「環状ブロック群とは何か？」	
元東京都埋蔵文化財センター 伊藤 健	15
基調報告「川岸遺跡の環状ブロック群」	
東京都埋蔵文化財センター 佐藤 悠登	25
発表 1 「川岸遺跡の人々の生活・活動エリア」	
東京都埋蔵文化財センター 加藤 秀之	27
発表 2 「川岸遺跡の人々が利用した石器石材」	
東京都埋蔵文化財センター 間 直一郎	31
発表 3 「川岸遺跡の人々の石器を作る技」	
東京都埋蔵文化財センター 塚田 清啓	35
発表 4 「川岸遺跡の人々の狩猟具」	
東京都埋蔵文化財センター 堀 恭介	39

## 川岸遺跡の概要

東久留米市文化財保護審議会委員 山崎 丈

### 1 川岸遺跡の発見と調査

川岸遺跡は、1979年（昭和54年）3月に存在が確認され、東久留米市No.120遺跡として東京都に登録されました（周知の埋蔵文化財包蔵地）。東久留米市では昭和53年度の国庫補助事業として市内全域における遺跡の所在を確認する悉皆調査を東久留米市文化財保護審議会に要請し、東久留米市遺跡分布調査団（団長戸沢充則）が結成され、1979年1月から3月に現地調査が実施されました。その結果、多くの遺跡が新たに確認され、遺跡数は53ヶ所から138ヶ所に増加しました。No.120遺跡もその一つで、その後、所在地が旧落合村字川岸であったことから「川岸遺跡」と名付けられました。

東京都は、1993年（平成5年）に河川の氾濫被害に対応するための落合川下谷橋調節池建設予定地として川岸遺跡を含む東久留米市浅間町二丁目地内の用地取得を完了しました。そして、当該地が川岸遺跡の範囲にあることから、担当局である北多摩北部建設事務所から東久留米市教育委員会に埋蔵文化財の取り扱いについて照会があり、東京都教育庁・事業者・市教委の三者において協議を進め、1995年（平成7年）3月に市教委による試掘調査、同年7月～9月に川岸遺跡調査団（団長戸沢充則）による確認調査が行われました。その結果、川岸遺跡は旧石器時代、縄文時代（前期中心）、中・近世の大規模な複合遺跡である可能性の高いことが明らかとなりました。そのことから、調節池工事と埋蔵文化財保護についての長期間にわたる協議と調整が進められました。この間には東久留米市文化財保護審議会から複数回の保存要望書も提出されました。

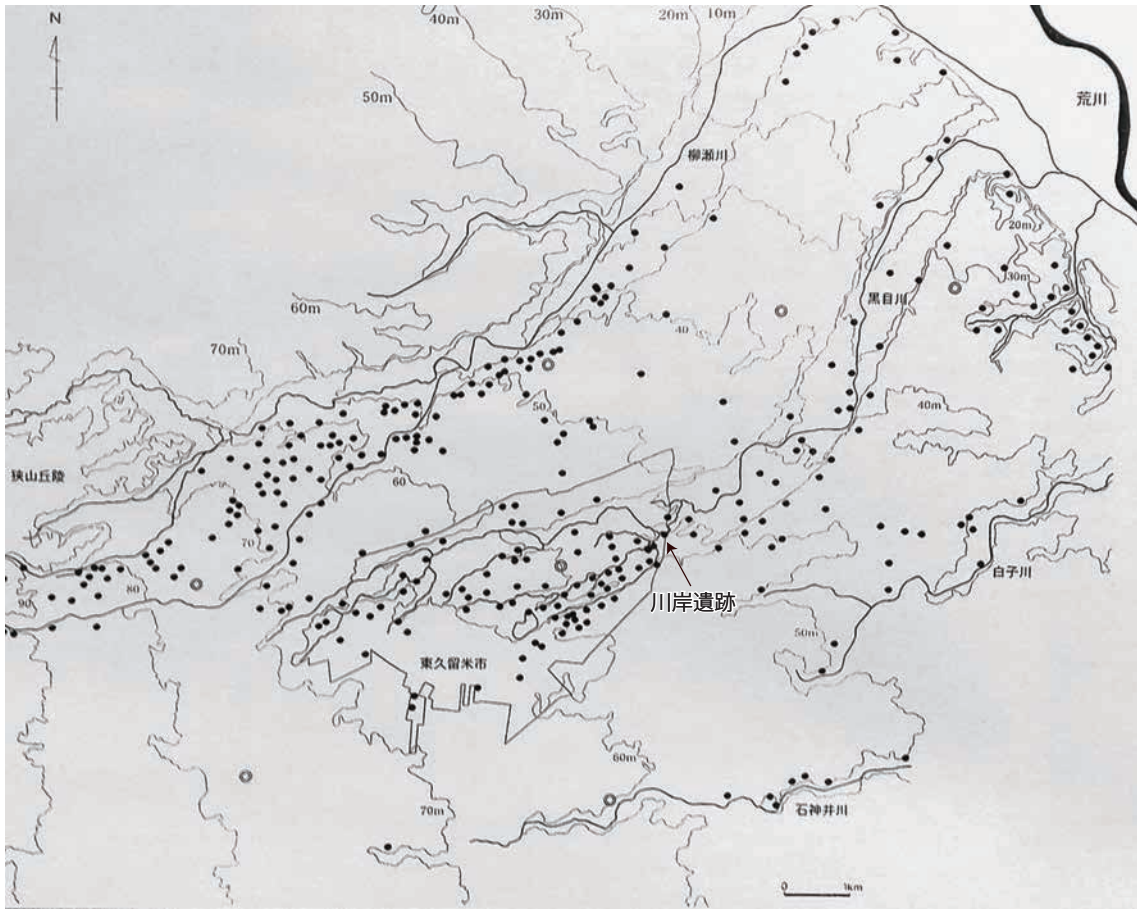
その後、予備調査（第3・4次調査）が2008

年（平成20年）に東京都埋蔵文化財センターによって行われ、本発掘調査（第5・6次調査）が2019年（令和元年）8月より2024年（令和6年）4月まで、12,600㎡を対象に同センターによって実施されました。

### 2 川岸遺跡の立地と概要

川岸遺跡は、武蔵野台地を東西に流れる古多摩川の名残り川とされる黒目川上流部に位置します。黒目川の上流域にあたる東久留米市は、西の標高70mから東の40mへと傾斜する湧水帯にあたり、市内のいたるところから地下水が湧き出ています。それらが流れを形成して小河川となり、さらに黒目川、落合川、立野川の三つの河川に集約されて東西に流れ、市の東端で合流して荒川（新河岸川）へと続きます。川岸遺跡は、これらの河川が合流する落合川右岸の台地上に形成された遺跡です（第1図）。

川岸遺跡の発掘調査によって旧石器時代、縄文時代、中・近世に関わる遺構や遺物が多数見つかりました（第2図）。旧石器時代では、約3万年前にさかのぼる立川ローム層第IX層から直径約40～45mと推定される環状に連なる遺物のブロック群が発見されて注目されています。さらに立川ローム層第III層にかけて4千点に近い石器が出土しています。縄文時代では、前期を中心とした竪穴建物跡27軒や土坑群が検出されています。中世から近世にかけては、掘立柱建物跡16棟や、台地縁辺に掘られた全長140mの溝が発見されています。古くから「小野殿ぶち」と呼ばれてきたように、江戸時代初期の鷹匠頭である小野久内吉次で知られる小野家の屋敷跡の可能性が高いと考えられています。



第1図 川岸遺跡の位置と周辺遺跡（縄文時代）  
 (東久留米市埋蔵文化財調査報告第36集『六仙遺跡Ⅳ』2010年・第4図に加筆)



第2図 川岸遺跡調査区全体図（東京都埋蔵文化財センター調査報告第387集『川岸遺跡』2024年・第23図）

## 川岸遺跡の旧石器時代について

独立行政法人国立文化財機構文化財活用センター研究員 飯田 茂雄

### 1 日本列島の旧石器時代

日本列島にはじめて人類が到達したのは今から約4万年前のこととされています。その後、縄文時代が始まる1万6千年前までのあいだを旧石器時代と呼んでいます。旧石器時代は「氷河時代」とも呼ばれる大変寒冷な気候で、最も寒かった時期（今から約2万年前）は平均気温が今より7～8℃程度低く、海面も100m以上低下するなど、現在とは大きく異なる環境でした。

### 2 旧石器時代の遺跡と暮らし

旧石器時代の人々は何を食べていたのでしょうか。日本の土壌は火山灰に由来する酸性土壌のため、動物や植物などの有機質のものは長い年月をかけて分解されてしまい、遺跡から出土するのは石器や礫を用いた焚き火の痕跡など、石を素材としたものがほとんどです。これまでに発見された例では、長野県野尻湖（ナウマンゾウやオオツノジカなど）や、青森県尻労安部洞窟（ノウサギなど）が知られていることから、絶滅してしまったナウマンゾウなどの大型獣や、シカやノウサギといった中・小型獣までさまざまな動物を狩猟していたと考えられます。こうした動物たちは食べるものを求めて移動しながら暮らしていました。それにあわせて、旧石器時代の人々も動物たちを追いかけ、絶えず移動しながら生活を営んでいたのです。

### 3 旧石器時代の道具

旧石器時代の石器は使い方や目的に応じて様々な道具が作られました。①狩猟具：ナイフ形石器や台形様石器、②加工具：動物の皮なめしに用いた搔器、木や骨などを削った削器、木材の伐採や加工用の磨製石斧、③石器作りの道具：石を打ち

割るハンマーや固定する台座などがあります。また、このほかにも石蒸し調理に用いられたと考えられる、焼いた礫がまとまって出土する礫群（れきぐん）などがあります。

これらの石器の材料となる石は、道具の使用方法に応じて使い分けられました。例えば、狩猟具はするどい刃先が必要になるため黒曜石や頁岩が、磨製石斧は木の伐採に耐えられるように硬く割れにくい蛇紋岩や凝灰岩などが選ばれました。

遺跡からは様々な石材が出土しますが、こうした石材は同じ場所で一度に手に入れられるものもあれば、黒曜石のように特定の場所でしか手に入れないものもあります。旧石器時代の人々は生活する場所にくわえて、道具の材料を手に入れるため、時には200kmを超える距離を移動していたことが分かっています。

### 4 旧石器時代の川岸遺跡

東久留米市川岸遺跡は、今から約3万5千年前から3万年ほど前に残された遺跡です。この遺跡の特徴は、「環状ブロック群」が発見されたことにあります。旧石器時代の遺跡では、たいていの場合、石器がいくつかのまとまり（ブロック）をもって出土します。環状ブロック群では、縄文時代の環状集落のように、そのまとまりがドーナツ状にめぐって分布することから「環状のムラ」とも呼ばれます。直径40mにもおよぶ巨大な遺跡がなぜ東久留米市に営まれたのか。旧石器時代の研究は、数少ないてがかり（石器や遺構など）から昔の暮らしを復元していくことに醍醐味があります。ぜひみなさんにも一緒に、その謎について考えてもらいたいと思います。



## 川岸遺跡の縄文時代について

学校法人自由学園最高学部教授 奈良 忠寿

### 1 縄文時代とはどんな時代か

地球環境は、約1万1700年前を境に、年平均気温の変化が急激で変動幅が大きい冷涼・乾燥した気候から、温暖・湿潤で、年平均気温の変動幅が小さく安定的な気候へと変化しました。世界各地で気候と動植物の変化に対応し、新石器文化と呼ばれる文化が展開しました。現在の日本列島の範囲で、温暖・湿潤な環境に適応した文化が縄文文化であり、日本列島で土器が出現した約1万6000年前から、水田稲作が日本列島に伝わる約2400年前までを縄文時代と呼んでいます。

### 2 川岸遺跡で見つかった縄文時代の活動の痕跡

川岸遺跡では、旧石器時代から江戸時代までの人々の活動痕跡が見つかっています。

縄文時代に限ると、27軒の竪穴住居跡をはじめとする、主に縄文時代早期後半から中期末までの活動痕跡がありました。

1995年頃の川岸遺跡の様子は、周囲を谷地形や河川に囲まれた平坦な台地が広がっている印象ですが、発掘調査の結果、もともと南側はさらに1m以上高く、北側や西側も川に向かって斜面が広がっていたことがわかりました。つまり、遺跡の南側に竪穴住居跡が希薄に見える空間がありますが、その部分は縄文時代以降に削られた部分であり、本来は竪穴住居などがあつたかもしれない、北側や南側も同様ということです。

川岸遺跡で活動していた人々が、竪穴住居跡を残した時代は、約7400～7000年前の縄文時代早期末、約6700～5700年前の縄文時代前期前葉から後葉にかけて、約5300～4700年前の縄文時代中期前葉から後葉にかけてです。

とくに、縄文時代前期前葉せきやま（関山式期）から後

葉もろいそ（諸磯b式期）にかけては、竪穴住居跡が19軒残され、かつ前期後葉の諸磯a式土器やb式土器が副葬されたお墓（土坑）が集中して見つかった空間があることは、川岸遺跡の大きな特徴の一つです。

### 3 川岸遺跡での縄文時代前期の生活

川岸遺跡で行われていた縄文時代の生活のなかで、縄文時代前期が遺跡の特徴をもっともよく表しています。いくつかの視点からご紹介します。

#### (1) 周辺遺跡との比較

縄文時代前期は、縄文時代のなかで最も温暖で、年平均気温が現在よりも高く、海水面も高かったと考えられています。関東平野では、内陸部まで海が入り込み（縄文海進）、当時の海岸線に沿って貝塚を伴う大きな集落が残された時代です。

そうした貝塚を伴う遺跡に比べ、内陸部は住居跡が1～2軒の小規模な遺跡がこれまで多く見つかっていました。しかし川岸遺跡は、内陸部の遺跡としては住居跡が多く見つかっています。

縄文時代の生活の道具である石器を大きく用途別に分け、周辺の遺跡と比較して、川岸遺跡での生活を考えてみます。すると、ある特定の道具が多く見つかる遺跡もありますが、多くの遺跡は石器数は比較的少なく、遺跡であまり差がないことがわかります。縄文時代前期は、バランスよく道具が見つかる遺跡と、何かの活動に特化したような遺跡が存在することが知られています。川岸遺跡でも、生活は川岸遺跡だけで完結していたわけではなく、周辺遺跡での活動と組み合わせることで、生活が成り立っていました。遺跡で生活する人数も、核家族のような単位になったり、親族のような複数の核家族のまとまりが一つの住居で生

活したりする、集合と分散を繰り返す生活だったと考えられます。そして移動の範囲は、沿岸部の遺跡も含むような範囲だったことでしょう。

### (2) 川岸遺跡に残された「墓」の問題

川岸遺跡では、縄文時代前期の「墓」と考えられる土坑が、重なり合うように群集して見つかりました。周辺の1～2軒しかみつからない遺跡では、墓と考えられる土坑はほとんど見つかりません。集合と分散を繰り返す生活のなかで、「墓」がある遺跡の意味を考えることはとても重要です。

さらに、川岸遺跡に残された墓の数は、亡くなった方一人につき1つと考えた場合、竪穴住居で暮らした人数と比べると、少し多い気がします。川岸遺跡の役割を考えるうえで、興味深い点です。

### (3) 自然環境と生活

遺跡が残された時代は現在よりも温暖でした。人の手が加わらなかった場合、スダジイなど照葉樹と呼ばれる種類の樹木が生育する森林が、周辺に存在したと考えられています。そこに人が生活し、樹木を伐採することで、コナラなどの落葉広葉樹に置き換わっていきます。また、縄文人は集落の周辺に、自分たちにとって有用な植物を管理していたとも考えられており、クリがその例としてあげられます。

川岸遺跡からも、周辺に生えていて縄文人が利用した樹木が炭化したものや、縄文土器に残された植物の種子の圧痕が見つっています。炭になったクワとスダジイが見つっていますので、温暖だった環境と、人の手があまり入らない空間が周辺に残っていた証拠となります。

## 4 その後の川岸遺跡

川岸遺跡では、縄文時代前期末（約5500年前）になると、一度人々の活動が希薄になります。

縄文時代中期前葉（約5300年前）から再び竪穴住居跡が見られるようになります。

縄文時代中期は東久留米市内で最も多く遺跡が残され、竪穴住居跡が見つっている時代です。川岸遺跡の周辺の縄文中期の遺跡には自由学園南遺跡があります。自由学園南遺跡と比較すると、川岸遺跡は見つかった竪穴住居も7軒と少なく、つくられた時代も限定的のようです。周辺から移住してきたり、また他の場所へ移動したりという生活が考えられますが、自由学園南遺跡のような竪穴住居跡が多く残された遺跡と、川岸遺跡での活動が異なっていたかどうかなど、関係が気になる所です。

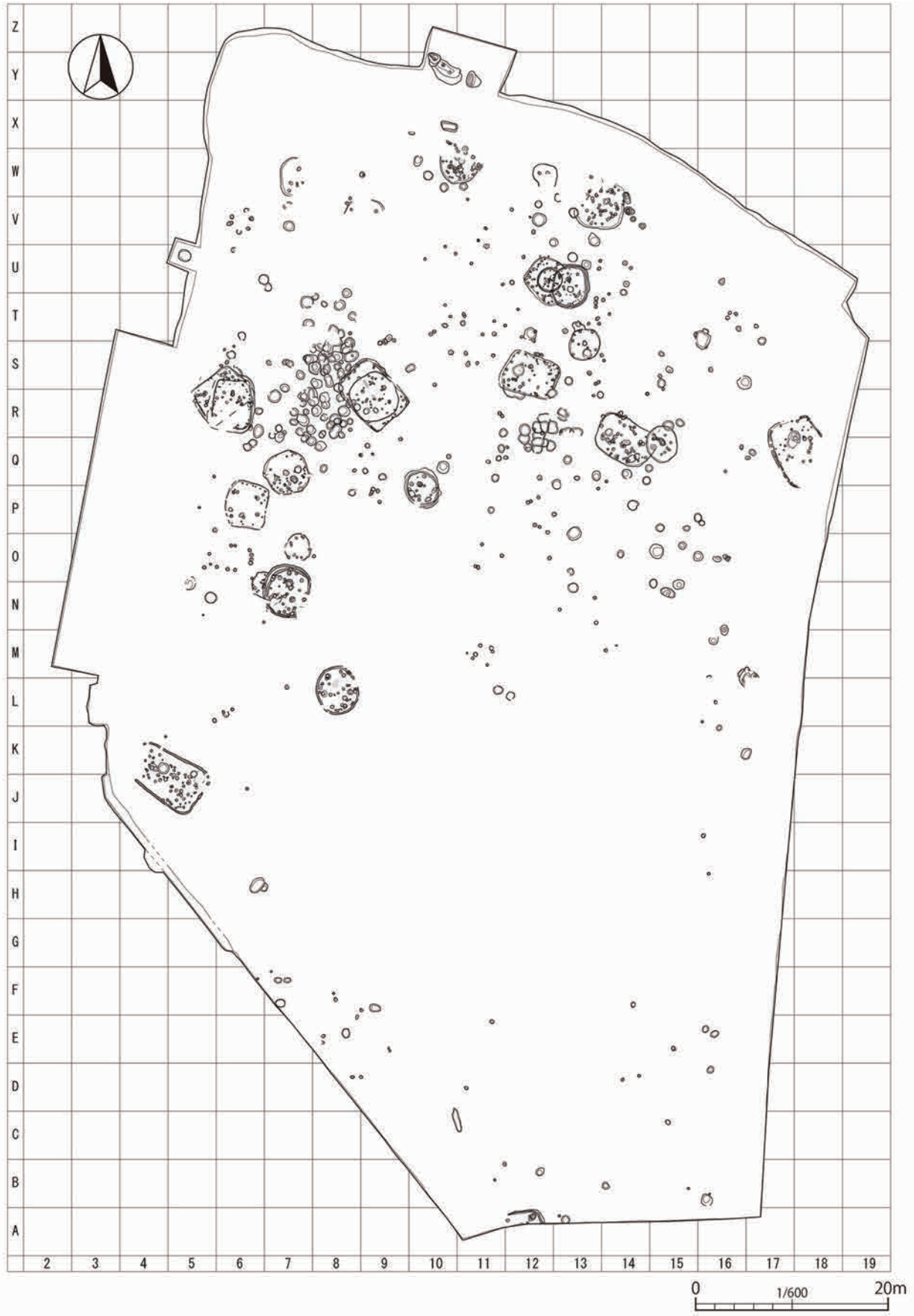
川岸遺跡は、縄文時代中期末（約4500年前）以降、人の活動痕跡が希薄になります。特に縄文時代後期後半（約3700年前）以降は、途絶えたと言っても言い過ぎではありません。縄文時代の後期・晩期に人の活動痕跡が極めて希薄になる現象は、川岸遺跡だけではなく東久留米市全体の現象です。

### おわりに

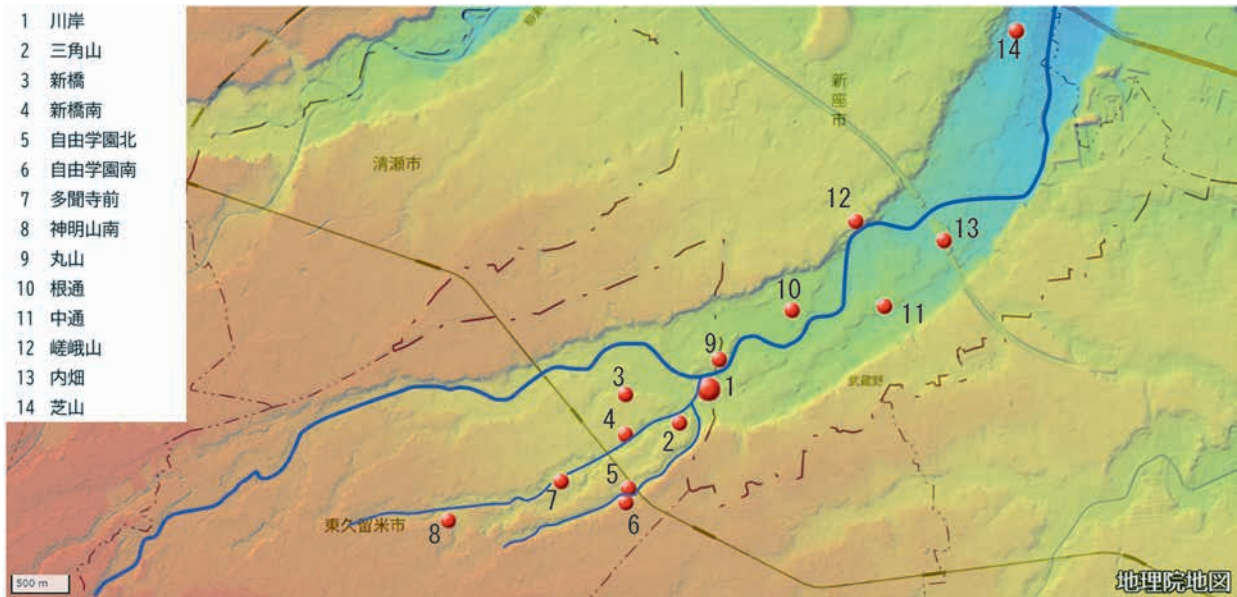
川岸遺跡の縄文時代の人々は、空間的には現在の私たちと同じ「東久留米市」という空間軸にいますが、自然環境や文化の点では大きく異なっていました。ですが、暮らしていく気持ちの上では、私たちと共通する気持ち、例えばこの場所をもっと住みやすくしたい、といった気持ちもあったと想像することも楽しいです。

遺跡という文化財は、発掘をしたら消えてしまうことが、寺社などほかの文化財と異なる点です。今私たちが持っている、川岸遺跡という遺跡が存在し、そこで縄文時代の人々が生活していたという記憶を、どう継承し街づくりにどう活かすのか、大きな課題と言えます。

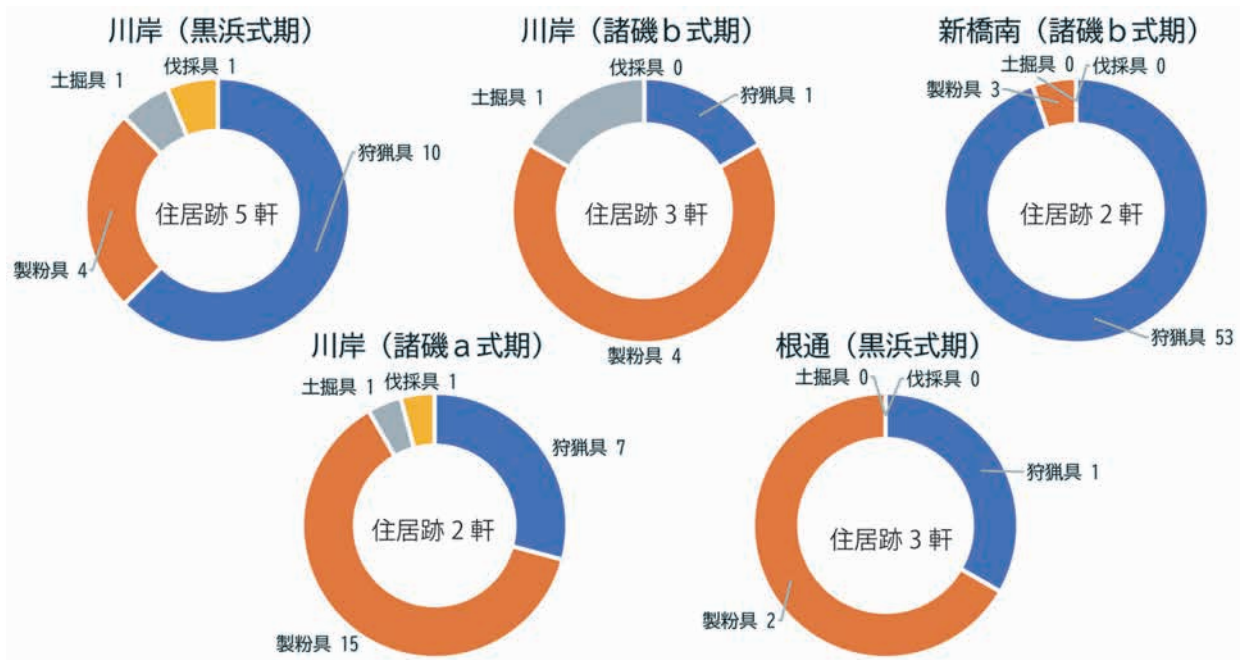
この講演をきっかけとして、東久留米市域という、同じ地域で暮らしていた先人のことに思いを巡らせていただければ幸いです。



第1図 川岸遺跡の縄文時代の遺構分布図



第2図 川岸遺跡周辺の主な縄文時代前期遺跡



第3図 住居内出土石器比率の比較



写真1 川岸遺跡から見つかった縄文時代前期後半の土器・石器

## 川岸遺跡の中近世について

開智国際大学准教授 野本 禎司

本講演では、川岸遺跡の中近世の時期について文献史学の立場から紹介したいと思います。本遺跡調査報告書における文献調査は、酒入陽子氏が担当されており、丁寧な紹介がなされています（『東京都埋蔵文化財センター調査報告第387集 東久留米市 川岸遺跡—落合川下谷橋調節池建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—』）。この成果に学ばせていただきつつ、当該期の本遺跡に所在した建物の屋敷主とされる旗本小野家が務めていた鷹匠頭という役職、遺跡所在地である武蔵国多摩郡落合村の周辺地域の状況を視野に入れながら報告していきたいと思います。

江戸幕府が編纂した武家の家譜である『寛政重修諸家譜』（以下、『諸家譜』）によれば、旗本小野家は、江戸時代以前は小田原城を拠点とした戦国大名・北条氏に仕えており、その後、徳川家康に拝謁、2代将軍秀忠の時に鷹匠頭に就任、その職を3代世襲しました。『諸家譜』によれば、寛永15年（1638）に100俵加増、同18年（1641）2月14日に「多摩郡栗原村」が旧知であることにより、その周辺で知行地300石を拝領したとされます。この「多摩郡栗原村」は、当時多摩郡に存在しない村名で、『多摩市史』通史編1（1997年）によれば、「元禄期に栗原村が一村独立する以前は新座郡片山村に含まれていたもので、これを指すのかもしれない。現在新座市栗原の地名で、東久留米市と接している」と注記されている。であるならば、小野家は、徳川将軍家より知行地拝領当初から、落合村を支配していたと考えてよいだろう。正保期（1644～48）成立とされる『武蔵田園簿』によれば、小野家は多摩郡落合村150石（東久留米市）、新座郡片山村50石、（埼玉県新座市）、埼玉郡山谷村132石余・同東方村67石余（埼玉県

越谷市）の4か村合計400石を知行していることがわかります。また、興味深いことは、寛文10年（1670）「忍鴻巣村高郷帳」に武蔵国埼玉郡牛重・鴻荃・芋荃村（埼玉県加須市）のうち計1771石余について「小野吉兵衛殿御鷹場」と記載があることです（澤村怜薫『近世旗本知行と本貫地支配』岩田書院、2024年）。小野家は、鷹匠頭を務めていた一定期間において、江戸時代初期、徳川将軍の有力な鷹場であった地域において、鷹の訓練場としての「御鷹場」を与えられて使用していたと考えられます。江戸周辺の鷹場やその役職の整備が進むと、鷹匠頭は江戸の千駄木・雑司ヶ谷の鷹部屋を管理し、鷹の訓練場である「捉飼場（とりかえば）」を支配しました。小野家が与えられた「御鷹場」は、のちの「捉飼場」のような位置づけであったと考えられます。

さらに鷹場に注目してみると、東久留米市域を含む周辺地域は、寛永10年（1633）以降、尾張藩の鷹場に指定されており、正保元年（1644）に前沢村（東久留米市）に、鷹狩を行った尾張藩主が立ち寄る休泊施設＝「御殿」が設けられました。前沢御殿の場所は、延命寺の境内にあり、近くに楊柳川が流れていたため楊柳沢御殿とも称され、この御殿は、延宝4年（1676）に清戸村（清瀬市）に移されるまで使用されました。

こうして本遺跡に中近世に所在した建物の屋敷主である小野家が鷹匠頭を務めていた時期を中心にみても、東久留米市域は徳川将軍家にとって重要な地域の一つであったといえるのではないのでしょうか。在方にはみられない武家的要素という点では、同時期の市域の小山村には旗本矢部家、南沢村には旗本神谷家、前沢村には米津家の支配陣屋が所在していました。これらの「武家屋敷」



## シンポジウム「川岸遺跡の環状ブロック群」

東京都埋蔵文化財センター 尾田 識好

### 1 はじめに

東久留米市川岸遺跡の発掘調査において、立川ロームⅨ層と呼ばれる層から「環状ブロック群」が発見されました。これは、旧石器時代の人々の「集落」の形の一つとみなされることが多いので、「環状集落」とも呼ばれます。

環状ブロック群は、径数 m からなる石器・礫の集中部（ブロック）複数が径 20～100m 程度の環状に分布するものを指します。日本列島の中央部を中心に分布し、後期旧石器時代前葉（約 3 万 5000～3 万 1000 年前）に特徴的にみられることから、約 4 万年前以降に列島に移住してきたホモ・サピエンスの初期の生活・文化・社会を探るうえで、重要な遺構とみなされています。

東京では調布市野水遺跡などの少数の例を除いて、典型的な環状ブロック群の発見例が少ないなか、川岸遺跡からは径 40m ほどと推定される典型的な環状ブロック群が検出されました。本シンポジウムでは、川岸遺跡の環状ブロック群について、様々な観点から分析してその特徴を明らかにし、なぜここに環状の「集落」が形成されたのか、その背景に迫ります。

### 2 環状ブロック群をめぐる研究

1980 年代以降の大規模行政発掘によって発見され、北関東や下総台地などで当初注目された環状ブロック群は、その後列島中央部を中心に分布が広がることが確認されました。環状ブロック群に関する最初の本格的な議論の場となった第 1 回岩宿フォーラムでは、列島全域で 37 遺跡 39 例が集成されました（岩宿フォーラム実行委員会編 1993）。約 30 年が経った最新の集成では、133 遺跡 163 例が数えられています（酒井

2020）。環状ブロック群の認定の問題はあるものの、ほぼ列島全域に分布することが示されています。

環状ブロック群が見られる時期は、立川ロームの層序でいうとⅩ層上部からⅦ層下部、年代としては約 3 万 5000～3 万 1000 年前にあたります。列島の後期旧石器時代は、約 3 万 9000 年前から 1 万 6000 年前ですので、存在時期が限定されることがわかります。

環状ブロック群のもつ意味の説明としては、儀礼的行為（石材交換等）を通じた社会的紐帯の確認集落説（小菅 1993、栗島 1993、白石 1992、須藤 1993 など）、大型動物狩猟集落説（小菅 2000、大工原 1990・1991・1993）、外敵警戒集落説（稲田 2001）、同盟関係確認集落説（佐藤 2004）などがあります。最近の研究では、佐藤説をベースとして、環状ブロック群は人々の生活圏が拡大する過程で現れ、移動経路が交わる地点に多く営まれていることから、集団間の社会的調整や狩猟活動上の必要性により発達し、その後生活圏が狭まって対面的な利害調整の確認が必要なくなって消滅したとする説が有力ですが（森先 2022）、議論は続いています。

### 3 シンポジウムの目的

これまでの環状ブロック群の研究では、石器の種類や石材の分布、台形様石器やナイフ形石器、石斧、接合関係からみたブロック間の関係など、様々な観点から分析されてきました。しかしながら、環状ブロック群に認められる現象が同じ時期の他の一般的な遺跡（環状ブロック群ではない遺跡）とどのように違うのか、何が特別なのか、という点について議論されることはほとんどありま

せん。こうした研究が進めば、環状ブロック群に関する理解がさらに深まるように思います。

なぜこれまで行われてこなかったのでしょうか。その理由の一つとして、環状ブロック群とその他の一般的な遺跡が同じ時期のものであることを示すのが難しいことが挙げられます。遺跡が残された時期については、近年では蓄積の進んでいる放射性炭素年代などの自然科学的な年代測定法を用いながら決定することが多いですが、これまでは石器の出土層位や石器の形と組み合わせ、石材の利用パターンなどの類似性をもとに行われてきました。この方法では、同じ時期とした遺跡同士のこれらを比較しても、当然ながら「同じ」という結果になってしまいます（これを循環論法といいます）。

日本列島において環状ブロック群と一般的な遺跡を比較するのに有利な地域の一つが、東京を中心に広がる武蔵野台地です。武蔵野台地では、出土した層位によって石器が残されたおよその時期を判定することができます。武蔵野台地の標準的な後期旧石器時代の層序は、風によって運ばれた物質が堆積した厚さ3m以上の地層（立川ローム）に基づきます。この堆積物は、富士山を含む複数の火山の火山灰や軽石、風に運ばれた塵に由来し、約4万年前から1万年前に堆積したものです。後期旧石器時代の遺物は、人々の活動痕跡が認められるもっとも下位のX層（約3万6000年前）から、もっとも上位のⅢ層（約1万6000年前）にかけて見つかります。考古学的な時期（段階）は、地層番号をとって「X層段階」や「Ⅲ層段階」などのように示されます。そして、これらの段階は石器を含む堆積層が形成された期間に一致するとみなされてきました。近年の研究では、石器が出土した層位を単純に段階に当てはめられないことがわかってきましたが（尾田2019）、おおよその時期を推定する一つの目安にはなります。

川岸遺跡の環状ブロック群は立川ロームIX層か

ら検出されたので、同じくIX層から発見された一般的な遺跡と比較することにより、それらとの共通点と相違点が見えてきます。そこから導き出された川岸遺跡の環状ブロックの特徴は、その性格を明らかにするための手がかりとなるはずですが。

それでは、川岸遺跡の環状ブロック群が作られた立川ロームIX層は、どのような時期だったのでしょうか。武蔵野台地における後期旧石器時代前葉（約3万6000～3万1000年前）の考古学的な様相を確認しておきましょう。

#### 4 後期旧石器時代前葉の人々の道具と行動

日本列島における後期旧石器時代の始まりは約3万9000～3万7000年前に遡りますが（森先ほか2020）、武蔵野台地に人々が来たのは、それより少し後の約3万6000～3万5500年前です（尾田他2024）。X層下部の時期です。やや大雑把な作りの大型の石器に加えて、狩猟具である台形様石器（平らな刃を持つ小型の石器）やナイフ形石器（縦長の剥片を用いた先の尖った石器）、木材加工用の局部磨製石斧（器体の一部を磨いた斧）などが伴います。大型・小型石器と石刃石器は由来が異なる石器と考えられ、それらが融合した姿で武蔵野台地に出現します。

これに続くのが、約3万5500～3万5000年前のX層上部の時期です。大型の石器は少なくなり、石刃の作り方がより丁寧になります。また、中部高地の黒曜石のように遺跡から100km以上離れた遠くの石も利用するようになり、人々の行動範囲が広がります。武蔵野台地では、この時期から環状ブロック群が見られるようになります。

次が、約3万5000～3万2500年前のIX層期です。川岸遺跡に環状ブロック群が営まれた時期です。石刃の作り方がさらに精巧になり、多くの石刃を効率的に作れるようになります。その石刃の基部や背部に加工を施したナイフ形石器が認

められます。台形様石器には基部を丁寧に作り出したものが見られるようになります。この時期以降、石材の獲得は北関東方面に徐々に広がっていき、人々の移動距離がさらに拡大します。

約3万2500～3万1000年前のⅦ層期では、背部を加工したナイフ形石器が中心となります。台形様石器には平らな刃を持つもの以外に、先の尖ったものも見られます。これは北関東によく見られる形のもので、引き続き環状ブロック群が作られます。

その後の約3万1000～2万9500年前のⅥ層期になると、中部高地の黒曜石や東北地方の珪質頁岩など遠くの石を用いた石刃製作と石刃石器が中心となります。人々の移動範囲や食料獲得方法が大きく変化しました。この頃には環状ブロック群はほとんど見られなくなります。

## 5 シンポジウムの構成

こうした武蔵野台地における後期旧石器時代前葉の一般的な考古学的な様相を踏まえながら、シンポジウムでは川岸遺跡の環状ブロック群について多角的に分析し、その性格と作られた要因を探ります。

伊藤健氏には、「環状ブロック群とは何か？」と題して講演いただきます。環状ブロック群といっても規模や形態が多様で、考古学者によってその認定に違いがあります。伊藤氏は、環状ブロック群と呼ばれているものを整理しなおし、その後の議論の参照枠を提示します。

川岸遺跡の調査担当者であった佐藤悠登の基調報告では、当遺跡の環状ブロック群を理解するうえで基礎的な情報を報告するとともに、環状ブロック群と強い関わりのある石斧について詳しく紹介します。

環状ブロック群が「集落」であったとすると、用途に応じて場が使い分けられていた可能性があります。加藤秀之は、石器と礫と炭化物の分布、

及びそれらの関係から、環状ブロック群の各場所で行われた人々の活動内容を明らかにします。

環状ブロック群を作った人々の由来を探る方法の一つに石材研究があります。間直一郎は、石材とその分布域を手がかりとして、人々がどこからどのようなルートで川岸遺跡に来たのかを検討します。

塚田清啓は、石器を打ち割った過程がよくわかる接合資料を中心に分析し、人々が先の石材を用いてどのような方法でどのような石器を作っていたのかを読み解きます。

環状ブロック群が人々の移動経路の交わる場所に作られたのであれば、それは狩りの対象となる哺乳動物にとっても同じと想定されるので、人々が環状ブロック群の周辺において共同で動物狩猟を行った可能性は十分に考えられます。堀恭介は、狩りの道具であるナイフ形石器と台形様石器の形と使用痕跡を通じて、人々の狩猟活動に迫ります。

パネルディスカッションでは、川岸遺跡の環状ブロック群と一般的な遺跡との共通点と相違点を意識しながら、川岸遺跡の環状ブロック群の特別な側面（あるいは一般的な側面）からその性格と形成要因について議論します。

このシンポジウムが、現在の東久留米に最初に居住し「集落」を営んだ人々の姿に思いを馳せていただく機会となれば幸いです。

## 引用文献

- 稲田孝司 2001「集団のなりたちと遊動生活」『先史日本を復元する1 遊動する旧石器人』岩波書店 81-113頁
- 岩宿フォーラム実行委員会・笠懸町教育委員会 1993『第1回岩宿フォーラム／シンポジウム 環状ブロック群—岩宿時代の集落の実像にせまる—』
- 尾田識好 2019「武蔵野台地における後期旧石器時代初期の編年と行動論—武蔵台遺跡の分析を中心に—」『旧石器研究』15 107-122頁

- 尾田識好・森先一貴・岩瀬 彬・國木田大・米田 穰  
2024「武蔵台遺跡X層における人類の居住年代」『日本旧石器学会第22回研究発表・シンポジウム予稿集』  
22-25頁
- 栗島義明 1993「環状ブロック群の構成」「環状ブロック群の構成」『第1回岩宿フォーラム／シンポジウム 環状ブロック群－岩宿時代の集落の実像にせまる－』岩宿フォーラム実行委員会・笠懸町教育委員会 40-43頁
- 小菅将夫 1993「環状ブロック群の分析と評価」『第1回岩宿フォーラム／シンポジウム 環状ブロック群－岩宿時代の集落の実像にせまる－』岩宿フォーラム実行委員会・笠懸町教育委員会 30-32頁
- 小菅将夫 2000「環状ブロック群の構造」『考古学ジャーナル』465 25-28頁
- 酒井弘志 2020「全国環状ブロック群集成2020」『「34,000年前、墨古沢は日本の中心であった」予稿集』16-28頁 酒々井町教育委員会
- 佐藤宏之 2004「環状集落の社会生態学」『旧石器研究』2 47-54頁
- 白石浩之 1992「旧石器時代後期から縄文時代草創期の集落」『かながわの考古学2集 神奈川県下における集落変遷の分析』1-14頁
- 須藤隆司 1993「岩宿時代における〈環状集落〉の歴史的背景－その視点と課題－」『第1回岩宿フォーラム／シンポジウム 環状ブロック群－岩宿時代の集落の実像にせまる－』岩宿フォーラム実行委員会・笠懸町教育委員会 44-46頁
- 大工原豊 1990「AT下位の石器群の遺跡構造と分析に関する一試論(1)－群馬県下のAT下位石器群の遺跡のあり方を中心として－」『旧石器考古学』41 19-44頁
- 大工原豊 1991「AT下位の石器群の遺跡構造と分析に関する一試論(2)－群馬県下のAT下位石器群の遺跡のあり方を中心として－」『旧石器考古学』42 33-40頁
- 大工原豊 1993「環状ブロック群が形成された背景－離合集散の要因について－」『第1回岩宿フォーラム／シンポジウム 環状ブロック群－岩宿時代の集落の実像にせまる－』岩宿フォーラム実行委員会・笠懸町教育委員会 36-38頁
- 森先一貴 2022『旧石器社会の人類生態学』同成社
- 森先一貴・國木田大・池田朋生・長谷部善一・村崎孝宏 2020「石の本再訪－日本列島後期旧石器時代の開始に関する研究－」『旧石器研究』16 43-58頁

## 環状ブロック群とは何か？

元東京都埋蔵文化財センター 伊藤 健

### 1 概要

日本列島の旧石器時代のほとんどの遺跡では骨や木などの有機物が発見されることはなく、石器と礫だけが出土します。石器はまとまって出土しますが、そのまとまりをブロックと言い、ヒトが石器を作ってごみとして残る、また保管した場所であると考えられています。石器をテント(家)の中で作ったか近くで作ったかはわからないのですが、ブロックがあるということはそこに生活したキャンプ(集落)があったことを示し、二三家族程度のキャンプであったと推測されます。

1980年代、群馬県下触牛伏遺跡(第3図1)の発掘で「ブロックがドーナツのように環を描いて並ぶ遺跡」(稲田2001)が見つかったのをきっかけに、同じような遺跡が他にもあることがわかりました(橋本・須田1987)。そのドーナツのようにブロックが並び、その環の中はほとんど石器が出土しない状態を、環状ユニットもしくは環状ブロック群というようになりました(橋本・須田1987、橋本1989)。現在では「環状ブロック群」という用語が定着しています。

その後の発掘によって栃木県上林遺跡(長径80m)や長野県貫ノ木遺跡第3地点(長径68m)のような長大なものが発見されるとともに、数も増えました。最新の集成によると、日本列島全域に163基を数えると言います(酒井2020)。千葉県、群馬県など関東地方に多いものの、北海道から熊本県まで全国に分布しています。ただしその存続期間は後期旧石器時代前半期、約36,000年前から30,500年前の間だけです。

普通の遺跡では数基のブロックが谷に沿って一列に並んでいる、あるいはあまり配置性がないのに対し、環状ブロック群はたくさんのブロックが

環を描いて並び、中央に石器が発見されない空間があります。佐藤宏之氏はその役割について、「社会的・生態的リスク回避戦略の一環として集団的な同盟関係の安定と緊密化を要求されることになる。そして、そのため分散して生活を送っていたであろう当該期の集団は定期的に集合して同盟関係を確認するために、環状集落に参集したのではないだろうか」と述べています(佐藤2006)。この「社会的リスク回避戦略」＝「同盟確認」のための環状集落説は現在の研究上一定の支持を得ています。

環状ブロック群が環状であるのは、ドーナツの環の中に石器が出土しない「中央空間」があるためです。これは現在に痕跡が残るような作業をしていない空間であり、「同盟確認」のために必要な共有の広場だったのでしょう。

しかし、最初の一例である下触牛伏遺跡からして中央空間の隅にブロックが存在し、全くの空白ではありません。実際に中央部が全く空白な環状ブロック群はほとんどないのですが、類例が増えるに従って中央部に空白の全くない「中身の詰まったあんぱん」型も「環状ブロック群」と捉えられるようになっていきました。中には、環ではなく三日月形のもの、円形や長円形だけでなく不整形円形とでも言えるようなものも現在では環状ブロック群とされています。全国163基の環状ブロック群の大部分がそうした事例で、真正な「ドーナツ型」は千葉県を中心に10件強のようです。

### 2 分類

環状ブロック群とは何か。この答えを探るために、今までの考古学研究は一つでも多く環状ブロック群の事例を集めその共通性を探ってきました

た（笠懸野 岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会編 1993・日本旧石器学会編 2005 他）。しかし、環状ブロック群の特殊性を明らかにするには、配置性の乏しい「普通のブロック群」との対比・分析が必要だと考えますが、その比較は今まであまり行われてきませんでした。そこで本講演では、全てのブロックの情報を集成し、その中で環状ブロック群にどんな特徴があるのか、何が違うのかを確かめようと思います。

この講演での分析対象は、東京都内、特に東京の中央に横たわる大きな武蔵野台地です。約 36,000～30,500 年前の立川ローム第 X 層～第 VII 層の遺跡・ブロックの情報を、遺跡調査報告書から収集しました。集計結果は遺跡 166 件、ブロック 509 基、石器出土点数 28,557 点です。

その中から「環状ブロック群」と「普通のブロック群」を抽出し比較しようと思います。基準は、ブロック、すなわち石器の平面分布の形状です。環状ブロック群は、ブロックが概ね環状に並ぶものを指します。従来の指摘どおり、概ねブロックが外側に環状に並ぶことを基本とし、内部（中央空間）にブロックがあってもこれに含みます。環状の一部に欠けががあるもの、不整円形に近いものも含むことにします。しかしそのままですと、広場と考えられる中央空間が明確でないものも含むことになります。そこで、環状ブロック群を 1 類と 2 類に分けます。1 類は、環状部分の石器の密集度が比較的高く、真正な環状＝ドーナツ型を示し中央空間を明確に有するものです。ただし中央が真っ白なもの以外にも、ドーナツのしぼり痕程度のわずかな石器分布（ブロック）がある事例（例：下触牛伏遺跡）も含めることにします（第 3 図）。中央が真っ白なものにすると 1 類はほとんどなくなってしまいます。また、環が真円ではなく長円形であっても構いません。

2 類は 1 類以外の、あんぱん型、三日月形、不整円形などの事例を指します（第 4 図 1～3）。

環状ブロック群でない「普通のブロック群」はここでは 3 類とします（第 4 図 4～6）。これらは従来の分類を踏襲していますので視覚的な感覚で形状分類しましたが、今後は統計的形狀解析など客観的に捉える必要があります。なおこれらブロック群以外に、遺跡からブロック 1 基しか発見されなかった、あるいは複数のブロックがあっても距離が遠くて性質が違い同時期とは考えられない「単独ブロック」が多数あります。

集成された東京都（武蔵野台地）の遺跡遺の内、1 類は西東京市田無<sup>みなみちよう</sup>南町遺跡旧石器時代 1（出土点数 1,056 点、ブロック 19 基、長径 70m（以下、同じ））だけでした。2 類は東久留米市川岸遺跡 1 群北側環状ブロック群（1,604 点、22 基、44m）、同南側環状ブロック群（465 点、7 基、37m）、東久留米市下里本邑遺跡 IX 層の石器文化 1～6 号ブロック（282 点、6 基、13m）、東久留米市多聞寺前<sup>たもんじまえ</sup>遺跡第 IX 層文化層 IX b～r ブロック（525 点、17 基、50m）、練馬区比丘尼<sup>びくに</sup>橋遺跡 C 地点 5 群 4～9 号石器集中部（176 点、6 基、22m）、練馬区もみじ山遺跡東京外かく環状道路練馬地区第 VII 層の文化層ブロック 1 号～9 号（108 点、9 基、22m）、小平市鈴木遺跡鈴木 10 文化層南 106～114 ブロック（1,068 点、9 基、45m）、府中市武蔵台遺跡第 2 次調査区等 X a・b 文化層他（不明、約 15 基、23m）、小金井市はけうえ遺跡第 IX 上層文化 C- IX -1～4・7（64 点、5 基、24m）、三鷹市羽根沢台遺跡 II 所収区第 VII 文化層 VII a～m ユニット（1256 点、13 基、20m）、調布市野水遺跡<sup>のみず</sup>第 1 地点第 4 文化層遺物集中 1～19（4,481 点、19 基、24m）、同第 3 文化層 1～10 号ブロック（541 点、10 基、40m）、世田谷区下山遺跡<sup>しもやま</sup>V 所収区第 4 文化層 2・3 号ブロック（423 点、6 基、11m）の 13 件でした。本シンポジウムの対象である川岸遺跡 1 群の環状ブロック群は長大な部類には属しますが、2 類に相当します。なお 3 類は 52 件です。

### 3 石器組成

集計された情報から各類の特徴を比較します。1類は1件しかありませんから、2類と3類の比較が主眼になります。1類は中央空間を持ち「同盟確認」の場として理解できます。必ずしもそうとは言い切れない2類が普通のブロック群である3類とどう違うのかを見出すことは、環状ブロック群の理解の一助となるでしょう。

ブロック数は環状ブロック群1類19基、2類144基、3類230基。石器出土点数は1類1,056点、2類9,955点、3類12,389点です。石器出土点数の全体に対する比率は1類4.5%、2類42.5%、3類52.9%で、環状ブロック群は特殊と言えるほど少なくありません。

石器の器種組成を第1図に示します。石器全体から剥片・碎片、石核、二次加工痕のある剥片を除いた道具としての石器での組成比率です。1遺跡しかない1類は別にして、2類、3類の間に大きな違いはありません。単独ブロックに多い「その他」は彫器、楔形石器などです。また、木材伐採・加工具である石斧が環状ブロック群に多いという説が唱えられたことがあります（橋本2006）。しかし、石斧の比率は1類0.5%、2類13.1%、3類10.1%で、必ずしも2類が3類に対して多いとは言えません。2類でわずかに多いのは野水遺跡第1地点第4文化層と下山遺跡V所収区第4文化層に多いからです。環状ブロック群だから特定の石器器種とつながっているということはないものと考えられます。

石材組成を第2図に示します。全体としてチャートが41.4%を占め第1位、それに頁岩、黒曜石、安山岩が続きます。1遺跡の1類は別にして、どれも特に2類と3類の傾向はあまり変わりません。黒曜石は、2類の川岸遺跡1群北側環状ブロック群、調布市野水遺跡第1地点第3文化層で比較的多い一方で、4,481点の石器出土点数を誇る野水遺跡第1地点第4文化層での

比率はわずか0.2%です。

器種組成、石材組成は各類別に傾向があるわけではなく、むしろそれぞれの遺跡・ブロック群でその組成が異なっていると診るほうが妥当です。環状ブロック群であるかないかにかかわらず、その示すキャンプは近隣の小河川流域もしくは武蔵野台地内で同じように行動したのではなく、それぞれのキャンプの集団が広域、例えば黒曜石産地である信州地方までも含めた広い範囲で遊動し、遠くの遺跡とつながっていたからだと思います。

### 4 平面形状と規模

2類と普通のブロック群（3類）とは隔絶的に異なっているのでしょうか。第4図は東京都（武蔵野台地）のブロック群からその石器平面分布図をいくつかピックアップしたものです（●は1点1点の石器の出土位置）。1～3は従来の研究の基準で環状ブロック群として理解することができ、2類としたものです。4～6はそれに該当しないとされてきた、普通のブロック群（3類）です。1は中央空間に石器が密に分布しますが、外縁は環状と言うにふさわしいものでしょう。しかし2・3と4を比較すると、4は確かに円形とは言えませんがあまり違いがありません。となると、4から5・6へ向けても連続的です。やはりこれまでの環状ブロック群の認定にインフレーションがおき普通のブロック群との違いが不明確になっている、もう一度基準を見直す必要がありそうです。

第5図左は東京都（武蔵野台地）のブロック群の長径と石器出土点数の関係をグラフにしたものです。1類の田無南町遺跡こそ長径が最も長く特殊ですが、2類と普通のブロック群（3類）とは長径も石器出土点数もすっぱり重なってしまいます。第3図右は群馬県内のブロック群の長径と石器出土点数の関係グラフです。群馬県は東京都と比較して環状ブロック群が圧倒的に多くかつ2類に石器出土点数が多いものが若干目立ちます

が、2類と普通のブロック群（3類）の関係は東京と大差ありません。

結局環状ブロック群の多くは、その平面形状の特徴を除けば普通のブロック群と変わらないのです。なるほど長大な環状ブロック群は「同盟確認」の場合かもしれません。2類の中にも「同盟確認」の場合があるかもしれません。しかし、2類の大部分は普通のブロック群（3類）との相違性と共通性を見直してみる必要があります。川岸遺跡の環状ブロック群も例外ではありません。

近年の研究では環状ブロック群の共通性を論じることは少なく、それぞれの環状ブロック群でどのような石器製作活動、石材搬入活動がなされたかを分析することが増えてきました（津島 1999a・b、神田 2018、水村 2023、宇井 2025、西井 2025、麻生 2025 他）。今後は環状ブロック群だけでなく、それ以外の普通のブロック群の分析も併行して進めつつ、それら全体の比較研究を行う必要があると考えます。川岸遺跡の環状ブロック群も、そうした分析を経てさらに光を放ってくれるはずです。

引用・参考文献

伊藤 健 2025『後期旧石器時代の新たな遺跡構造論 東京の遺跡を中心に』新泉社

稲田孝司 2001『遊動する旧石器人』岩波書店

笠懸野 岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会編

1993『岩宿フォーラム/シンポジウム環状ブロック群—岩宿時代の集落の実像にせまる—資料集』

小菅将夫 2000「環状ブロック群の構造」『月刊考古学ジャーナル』465 25-28 頁 ニュー・サイエンス社

小菅将夫 2006『赤城山麓の三万年前のムラ 下触牛伏遺跡』新泉社

酒井弘志 2020「全国環状ブロック群集成 2020」『「34,000年前、墨古沢は日本の中心であった」予稿集』16-28 頁 酒々井町教育委員会

佐藤宏之「環状集落の社会生態学」『旧石器研究』2 47-54 頁 日本旧石器学会

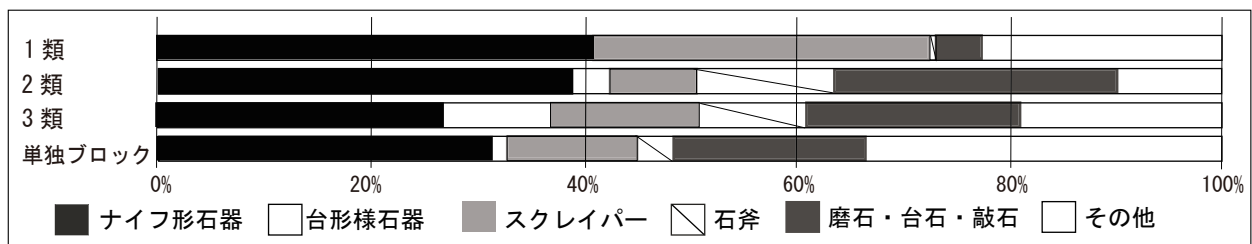
島田和高 2012「環状のムラ、登場」『2012年度明治大学博物館特別展 氷河時代のヒト・環境・文化』51-90 頁 明治大学博物館

橋本勝雄・須田良平 1987「1986年の考古学界の動向 旧石器時代」『月刊考古学ジャーナル』277 5-28 頁 ニュー・サイエンス社

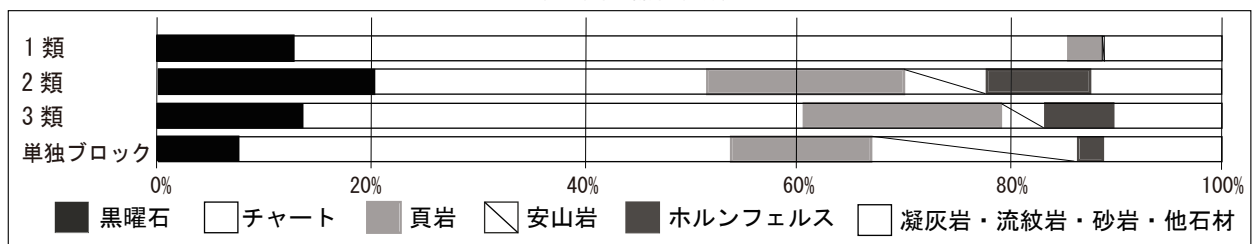
橋本勝雄 1989「AT降灰以前における特殊な遺物分布の状況」『月刊考古学ジャーナル』309 25-32 頁 ニュー・サイエンス社

橋本勝雄 2006「環状ユニットと石斧の関わり」『旧石器研究』2 35-46 頁 日本旧石器学会

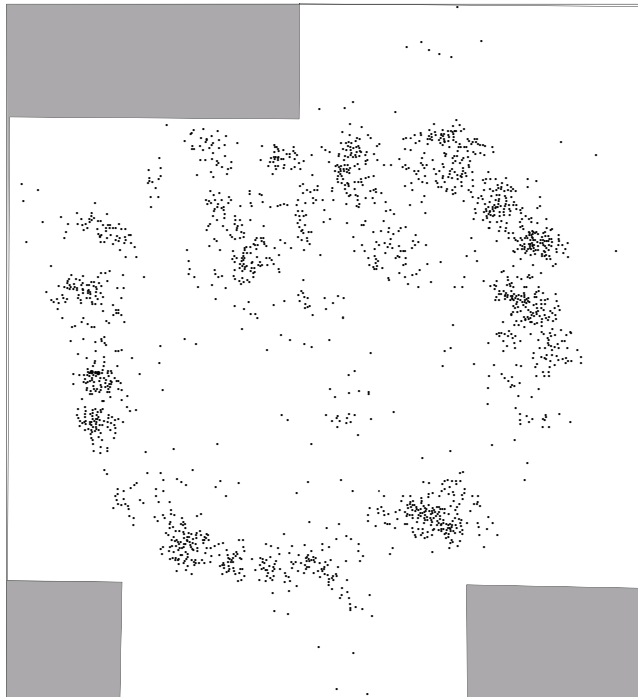
(参考文献の一部と遺跡調査報告書は割愛した)



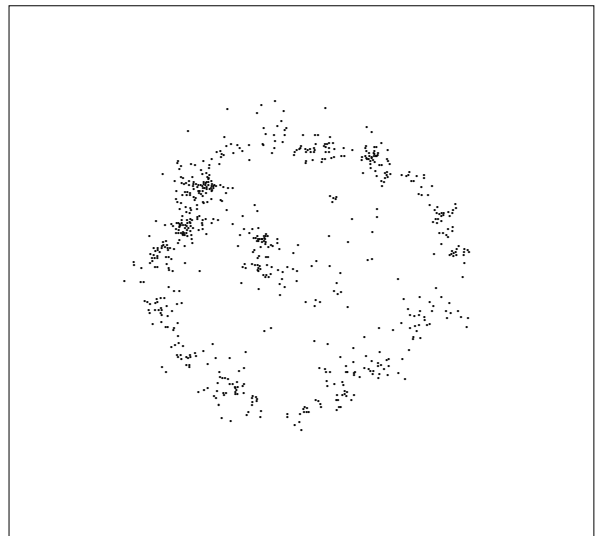
第1図 器種組成



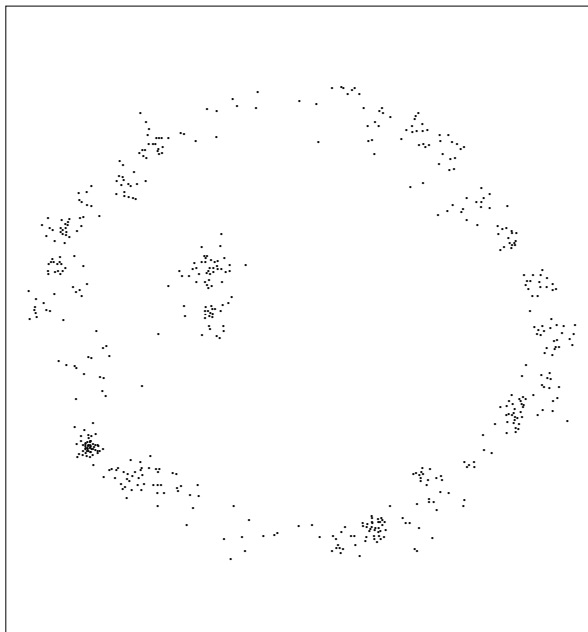
第2図 石材組成



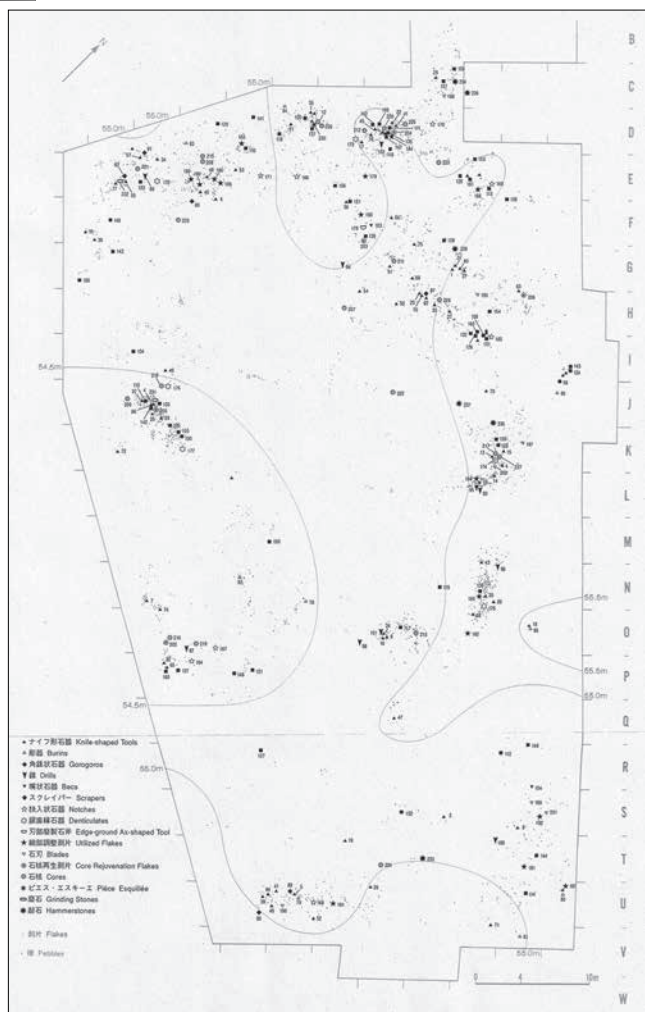
1. 群馬県下触牛伏遺跡 (1類)



2. 千葉県池花南遺跡第1文化層 (1類)



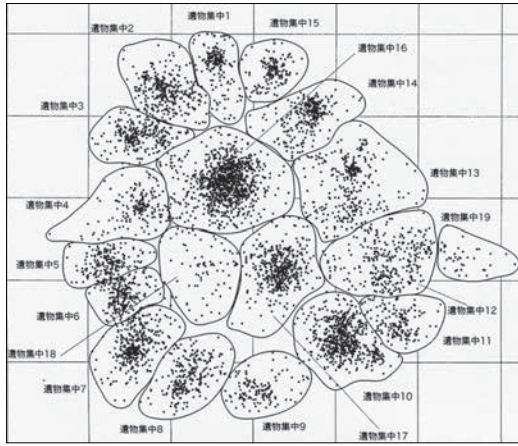
3. 千葉県南三里塚宮原第1遺跡3 (1類)



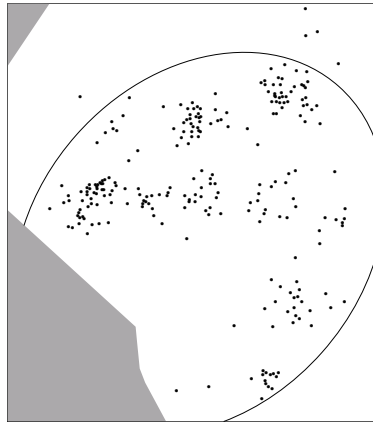
4. 田無南町遺跡 (1類)

0 10m

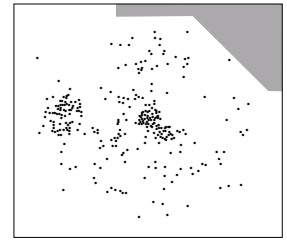
第3図 ブロック群の平面分布 (1) (3/20,000)



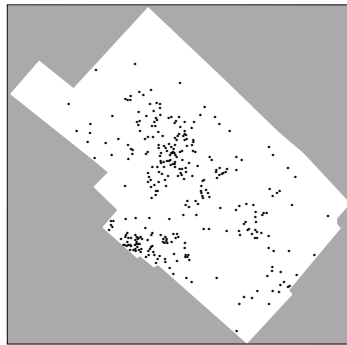
1. 野水遺跡第1地点第4文化層 (2類)



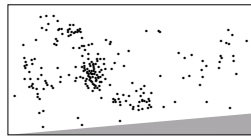
2. 比丘尼橋遺跡C地点5群 (2類)



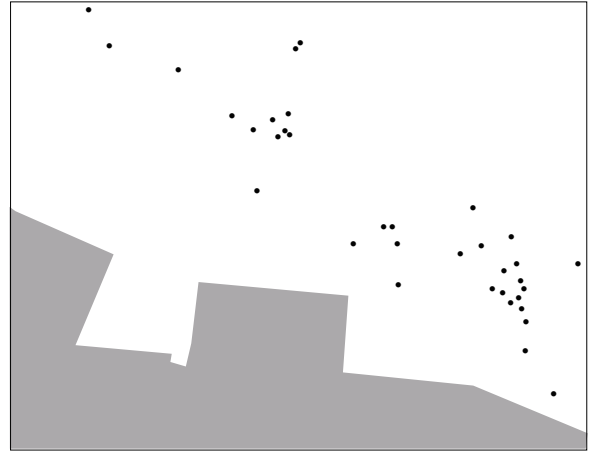
3. 下里本邑遺跡  
第Ⅱ区層の石器文化  
(2類)



4. 多摩蘭坂遺跡第8地点第1文化層 (3類)

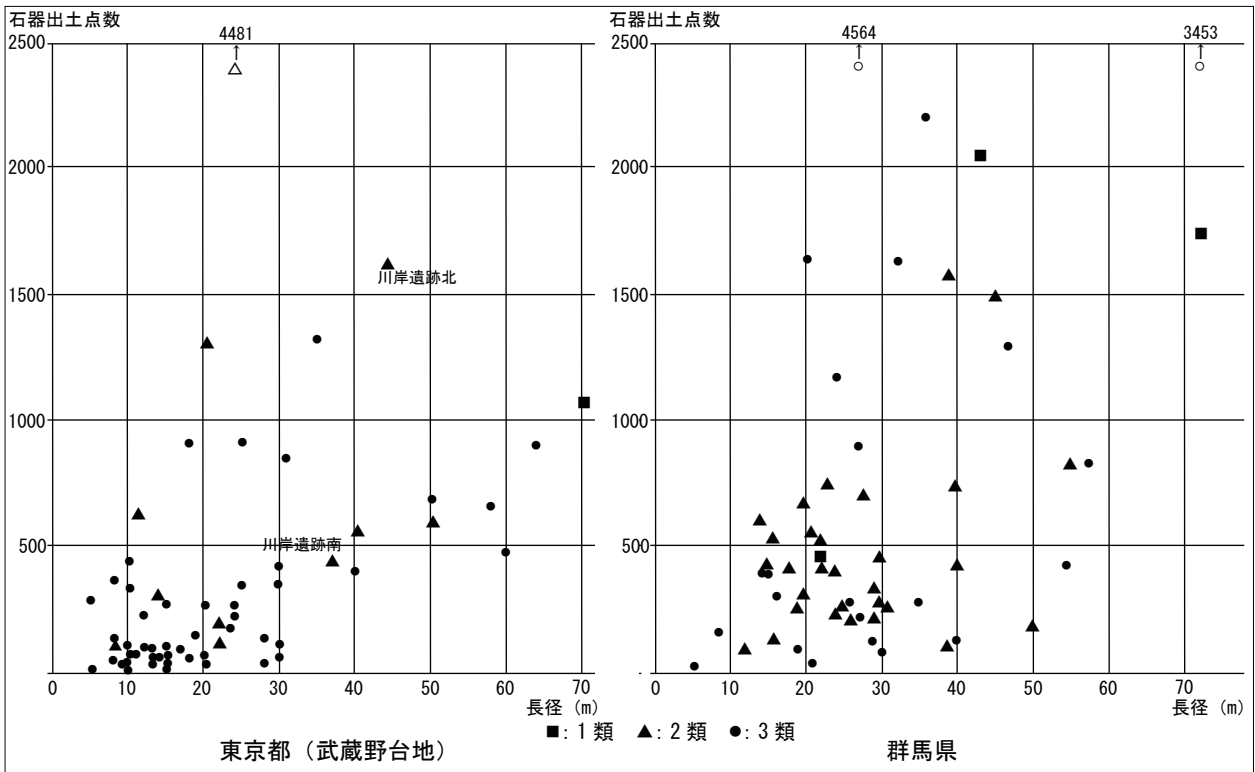


5. 川北遺跡第2地点  
第2文化層 (3類)



6. 堂の下遺跡第5集中部 (3類)

第4図 ブロック群の平面分布 (2) (1/5,000)



第5図 ブロック群の長径×石器出土点数

## 川岸遺跡の環状ブロック群

東京都埋蔵文化財センター 佐藤 悠登

川岸遺跡は、東久留米市浅間町2丁目地内に所在し、都県境に面しています。遺跡は落合川と黒目川の合流点の右岸側、3～4mほどの高さで台地が北西に向かってせり出す地点に立地していました。川岸遺跡の調査では、中・近世、縄文時代でも大きな成果を得られていますが、今回は旧石器時代の成果、中でも一番古い時期の成果に注目して発表を行います。

川岸遺跡の立地していた台地では、4mのローム層の堆積を確認し、武蔵野礫層から武蔵野ローム層、立川ローム層の連続した堆積を確認しました。調査では、遺物の確認された立川ロームⅢ層からⅩ層までを調査しました。そのうち旧石器時代の遺物が集中して見つかったのは、Ⅳa層、Ⅳb・Ⅴ層、Ⅵ・Ⅶ層、Ⅸb層の4つでした(第1図)。今回発表する環状ブロック群が見つかったのは、Ⅸb層になります。

Ⅸb層(報告書内1群)からは、石器2,122点、礫2,005点の遺物を確認しました。また、Ⅹa層上部～Ⅸa層にかけて炭化物1,193点を得ています。今回の調査で検出した遺物は、平面的な遺物分布と接合関係から、大きく北側環状ブロック群と南側環状ブロック群の2つの環状ブロック群として認識しました(第1図上)。

### 1 北側環状ブロック群(第1図・第2図上)

調査区北西の台地先端の平坦部から石器1,601点、礫1,471点を検出しました。分布の北および西については、後世の改変により失われています。そのため正確な全容は不明ですが、石器集中部および礫集中部が径40m程度の環状に分布する状況を確認しました。接合資料は、石器168個体580点(接合率37.1%)、礫64個体155点(接合率10.5%)を確認しました。多数の集

中部間接合を確認し、各集中部がほぼ同時に存在した様子がうかがえました。

石器石材は、チャート(393点)や珪質頁岩(370点)などの利用が多く、次いで黒曜石(203点)、安山岩(156点)、頁岩(153点)、凝灰岩(136点)、ホルンフェルス(85点)が主に利用されています。また、少数石材として、硬質頁岩(29点)や水晶(7点)、玉髓(29点)を確認しました。多数の剥片のほかに石刃や縦長剥片を素材としたナイフ形石器(35点)、不定形剥片を素材とした台形様石器(9点)、斧形石器(19点)が主に見つかっています。特に斧形石器は、形態のはっきりとわかる資料を19点16個体確認しました。

礫集中部は、環状部中央を中心にいくつかの集中部を認識することができました。北側環状ブロック群の北東側には、明確に集中部を形成しないものの、150～300g程度の礫が散漫に分布している状況を確認しました。

### 2 南側環状ブロック群(第1図・第2図下)

調査区南西の微高地の北側に分布しています。石器465点、礫496点を検出しました。分布の西側については、後世の改変により失われており、南西側に関しては調査区外のため、未確認です。接合資料は、43個体126点(接合率27.5%)を確認しました。石器集中部と礫集中部が、北側と比べてややいびつで小規模ではありますが、環状に分布する状況を確認しました。南側の集中部間でも接合関係を確認できております。

石器石材は、安山岩(183点)の利用が多く、次いでチャート(99点)、珪質頁岩(69点)、黒曜石(37点)、頁岩(36点)が利用されています。

剥片以外の出土数は少ないですが、ナイフ形石

器（6点）、台形様石器（2点）、斧形石器（1点）が出土しています。

### 3 年代や周辺の環境（理化学分析の成果）

川岸遺跡では、ローム層の分析や炭化物の分析により、火山灰の降灰や当時の気候、植生、年代などのデータが得られています。また石器石材や使用痕分析などによる成果も得られており、以下に紹介します。

#### ・ローム層（土壌）の分析

ローム層に含まれる火山灰や鉱物の分析から、環状ブロック群の大まかな年代が分かるとともに、他の地域や他の遺跡と比較するための手がかりが得られました。例えば火山灰分析では、鍵層となる広域テフラが検出されています。特にⅦ層上部からⅥ層にかけて検出した始良丹沢火山灰（AT）は、日本各地で見つかる重要な基準となる広域テフラです。約3万年前に噴出しており、ATより下位から見つかった環状ブロック群が3万年以前ということが明らかになりました。他にも輝石やカンラン石を多く含む層準が確認されており、これにより武蔵野台地上の他の遺跡のⅨ層と川岸遺跡のⅨ層を対比することができました。

火山灰以外の土壌分析だと、植物珪酸体分析から、古気候の指標となるメダケ属とササ属の植物珪酸体比が得られています。1群の検出層準であるⅨb層では、下部は比較的冷涼な気候で増加するササ属が優占し、上部は温暖な気候で増加するメダケ属の植物珪酸体が多数を占めることがわかりました。そのことからⅨ層中で比較的冷涼な気候から温暖な気候へと変化している様相が伺えました。氷期の中でも比較的温暖な時期から最終氷期最寒冷期への移行期にあたるⅨ層では、温暖な気候と寒冷な気候を比較的短期間で繰り返すことが指摘されており（佐瀬ほか2008）、川岸遺跡の分析結果もこれを追認する結果と考えられます。

#### ・炭化物の分析

樹種同定分析では、特にⅨb層では、温帯～

冷温帯落葉広葉樹に属するサクラ属など複数の樹種が確認されました。野川中洲北遺跡の花粉分析や野川泥炭層の花粉分析では、詳細な時期は不明ですが、AT下位で武蔵野台地周辺に温帯～冷温帯性の落葉広葉樹が広がっていたと推定されており（パリノサーヴェイ1989、辻1992）、Ⅸb層の温暖な時期には、同様に温帯～冷温帯性落葉樹林が広がっていた可能性があります。

放射性炭素年代測定では、1,193点の炭化物のうち54点について年代測定を実施しました。層位的な出土状況などと合わせて検討した結果、北側環状ブロック群の形成年代については3.5～3.4万年前ごろと考えられました。南側環状ブロック群の形成年代については、3.4万～2.9万年前と測定結果に幅のあるものとなりました。

#### ・石材の分析

石器石材に関して、黒曜石と水晶の産地同定分析を行いました。黒曜石産地同定分析では、Ⅸ層石器群から出土した203点のうち分析可能な大きさであった190点を分析しました。その結果、静岡県伊豆半島の天城柏峠産（156点）が多数を占め、同じく静岡県の箱根畑宿産がそれに次いで多く利用されていました。諏訪星ヶ台や和田鷹山といった長野県中部高地の産地も複数含まれており、少数ながら海を越えて、神津島恩馳島の黒曜石も利用されていたことがわかりました。

水晶製石器の産地同定分析も実施し、8点の分析を行い、6点について分析結果を得ることができました。6点とも山梨県の甲府盆地東縁の竹森鉦床産と推定されました。武蔵野台地では武蔵台遺跡第2次調査区、野川中洲北遺跡の水晶のほか、比丘尼橋遺跡C地点からも水晶製石器の出土があり、いずれも産地分析の結果、山梨・長野方面からの持ち込みが示唆されており、（東京都埋蔵文化財センター2023）信州産黒曜石の利用に伴って持ち込まれていたのかもしれませんが。

#### ・石器の分析

石器の使用された部位や使用方法について使用

痕分析も実施しています。ナイフ形石器、台形様石器、斧形石器、搔器、削器といった道具として利用された可能性の高い石器を主な対象としました。結果として53点の石器に55カ所の使用痕が認められました。環状ブロック群に伴う石器では、ナイフ形石器、台形様石器、斧形石器、剥片類から使用痕を確認しました。台形様石器、ナイフ形石器からは投射・刺突に伴う痕跡が確認され、どちらの石器も主に狩猟具として機能していたと推定されています。斧形石器は、刃部から敲打作業の痕跡が認められました。明確な対象物はわかりませんが、刃のつぶれ具合などからみて、骨・角のような硬質な物ではなかったようです。

#### 4 川岸遺跡の環状ブロック群に伴う石器—斧形石器について—

川岸遺跡では、環状ブロック群に伴う石器として、主にナイフ形石器、台形様石器、斧形石器が得られています。いずれも環状ブロック群が日本列島で確認される後期旧石器時代前半期を代表する石器です。その中でも斧形石器の出土数は多く、はっきりと形のわかるもので17個体分が出土しています。一遺跡から出土した数としては南関東でも最多級のもので、川岸遺跡の特徴といえます。

川岸遺跡の斧形石器を観察すると、使用している素材の状態で2種類に分けられます。一つが細長いあるいは扁平な円礫をそのまま利用して製作されたものと、大型の礫を打ち割って得られた剥片を素材としたものです。後者を例にして製作の大まかな流れを復元してみます。1 大きな礫を打ち割る。2 おおまかな形を作り出す、3 細部を調整し、刃部を作り出す、使用により痛んだ場合は調整を再度繰り返す(第3図)といった製作の流れが復元されます。

斧形石器の分布も合わせて見ていきます。まず北側環状ブロック群では、環状部分を中心に全体に出土が見られます。出土したものは斧形石器と調整剥片になります(第2図上・写真1)。上記

の製作の流れでみると、製作段階で生じるような原石や大型の剥片はなく、遺跡内で斧形石器の製作はしていないようです。斧形石器については、第4図2などは平面形が弧状や断面形状が甲高になっており、刃部の再生を行っていると推測される資料が複数含まれています。このことから北側環状ブロック群では斧形石器を使った作業もしくは使用後の石器のメンテナンスをしていたことがうかがえます。一方、南側環状ブロック群では、斧形石器の検出は1点のみに留まります。調整剥片等関連する遺物の出土もないため、斧形石器を積極的に使用するような状況ではなかったようです。北側と南側の環状ブロック群で斧形石器の形状には大きな違いが見られませんが、作業の内容は異なっているようです。

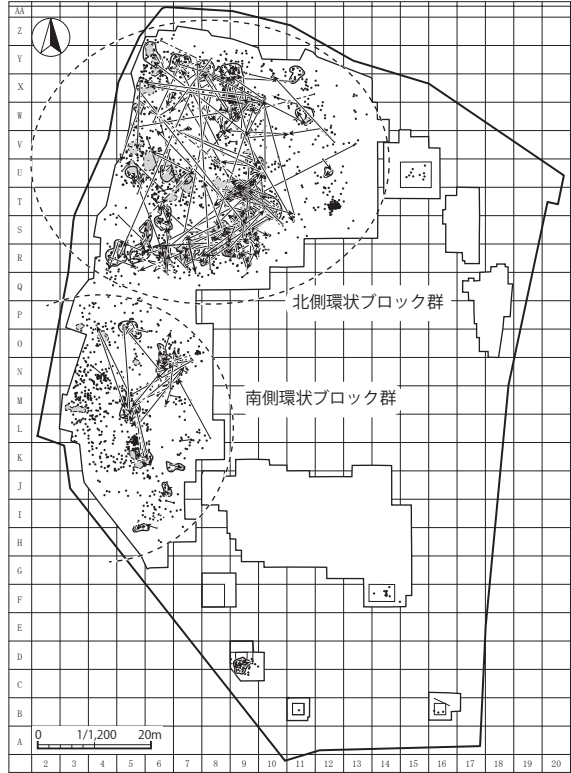
#### 5 まとめ

川岸遺跡の南北2基の環状ブロック群は、類似した石器が用いられつつ、規模や石材など差異も認められます。自然科学分析による当時の環境や年代に関する成果も得られており、環状ブロック群の形成や背景にある旧石器時代の人々の行動を考えていく上でも地域の歴史にとっても重要な遺跡といえます。

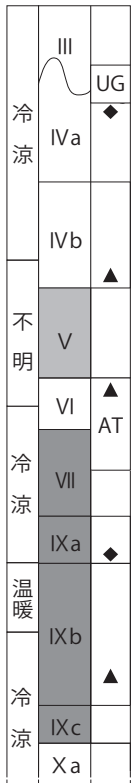
#### 引用・参考文献

- 佐瀬 隆・町田 洋・細野 衛 2008 「相模野台地, 大磯丘陵, 富士山東麓の立川—武蔵野ローム層に記録された植物珪酸体群集変動—酸素同位体ステージ5.1以降の植生・気候・土壌史の解説—」『第四紀研究』47巻1号 第四紀学会 1-14頁
- 東京都埋蔵文化財センター 2023 『練馬区比丘尼橋遺跡C地点T区』東京都埋蔵文化財センター調査報告第376集
- パリノ・サーヴェイ 1989 「野川中洲北遺跡植物化石層の堆積環境と植生」『野川中洲北遺跡—自然科学分析編—』69-93頁 小金井市遺跡調査会

1群 (IXb層)

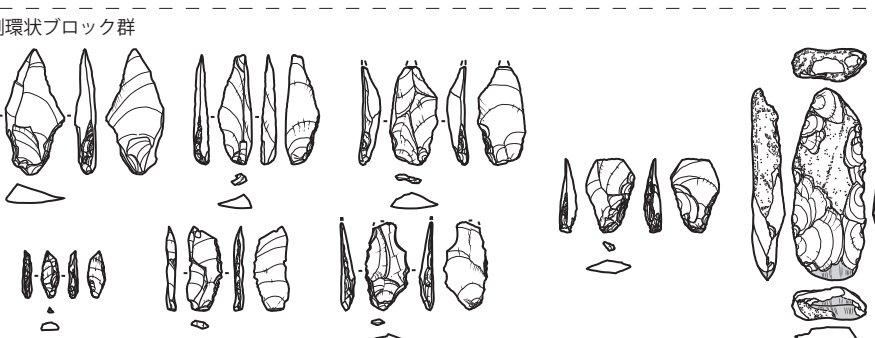
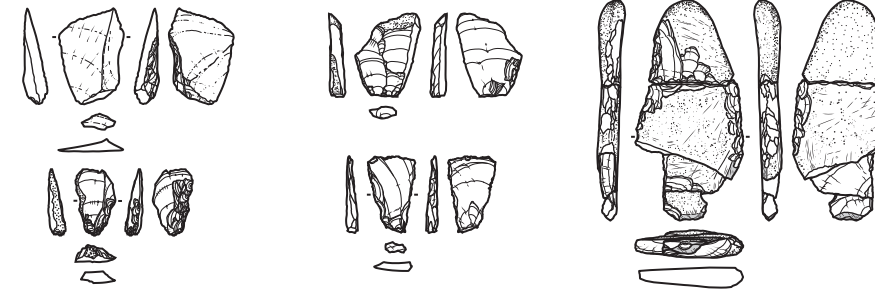


気候 ローム層序

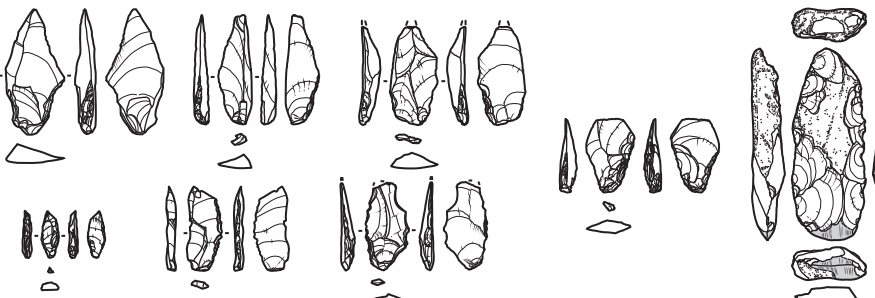


1群 3.5～3.4万年前 (礫集中部 1-14 周辺)

北側環状ブロック群



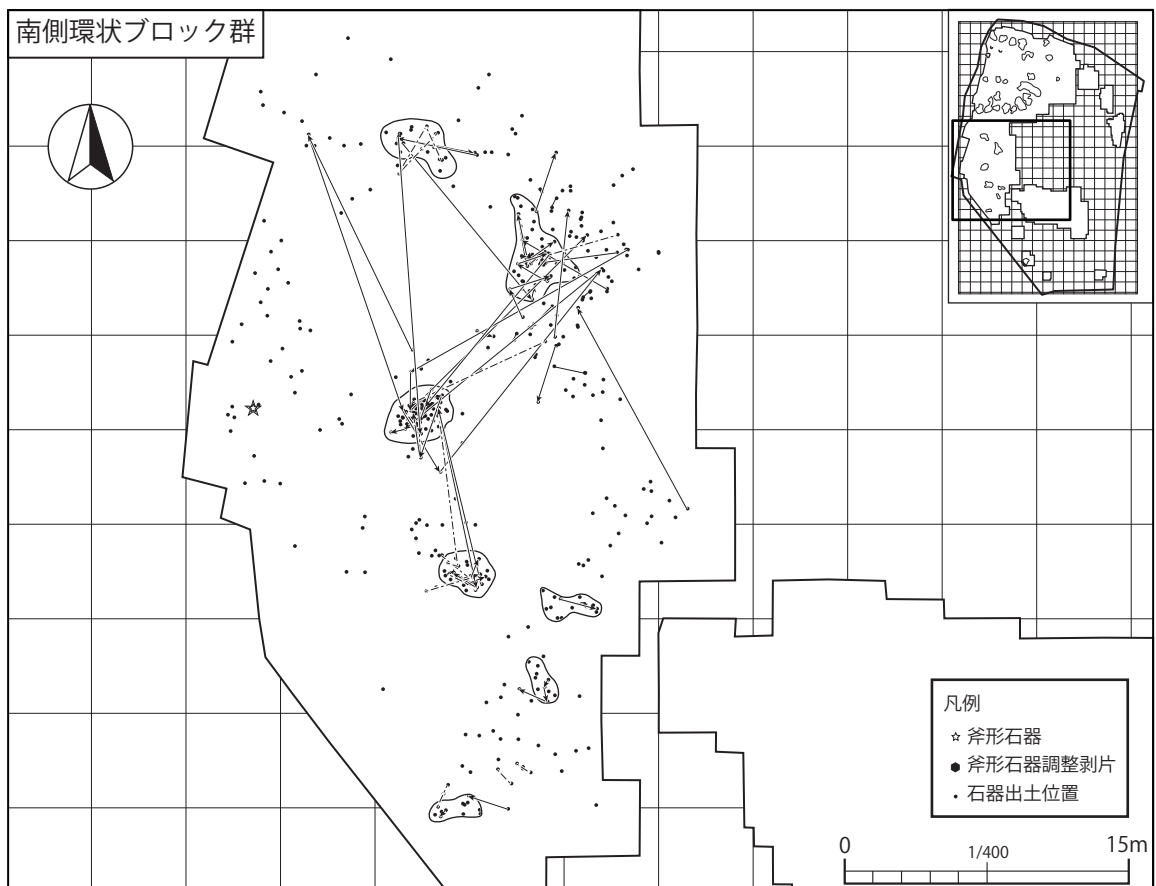
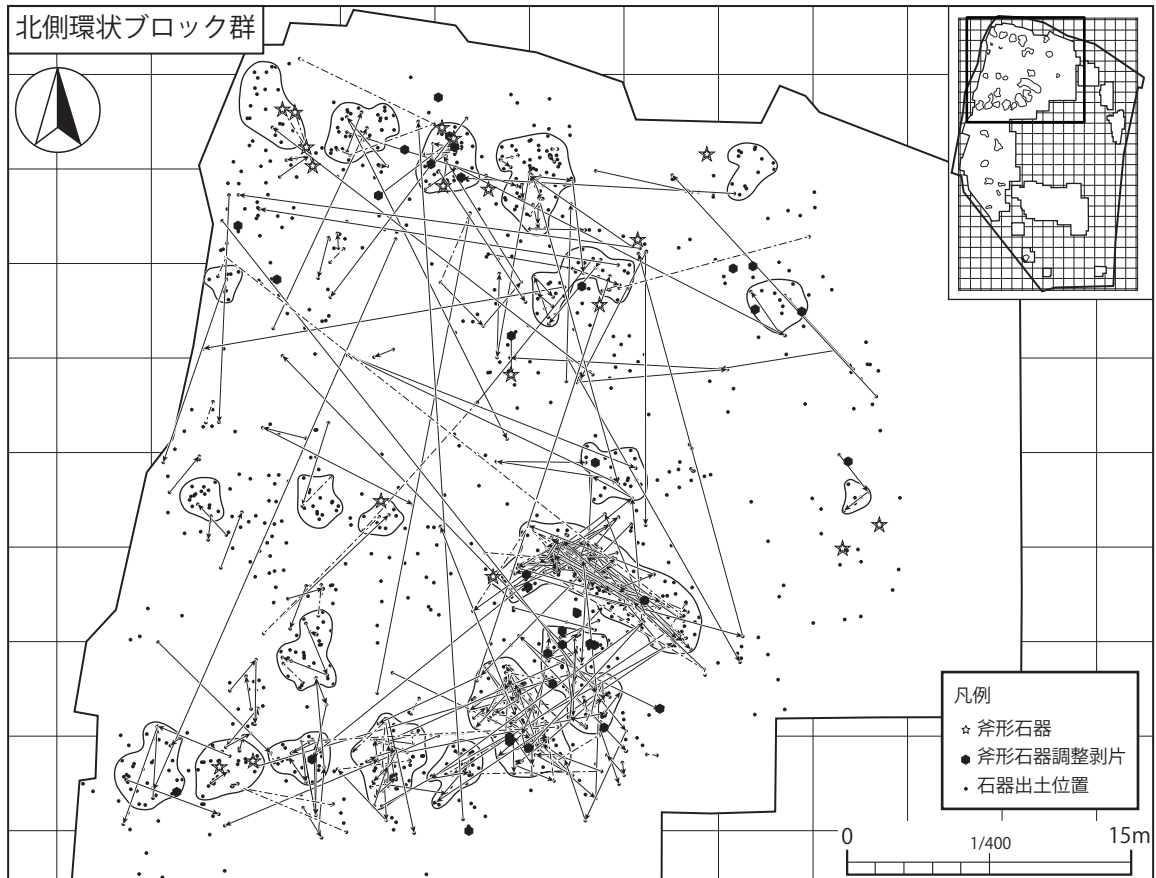
南側環状ブロック群



- 第I暗色帯
- 第II暗色帯
- ◆ カンラン石 極大層準
- ▲ 輝石 極大層準

0 S=1/4 10cm

第1図 遺物分布と石器群概観図



第2図 川岸遺跡の斧形石器と調整剥片の出土位置(上:北側環状ブロック群、下:南側環状ブロック群)



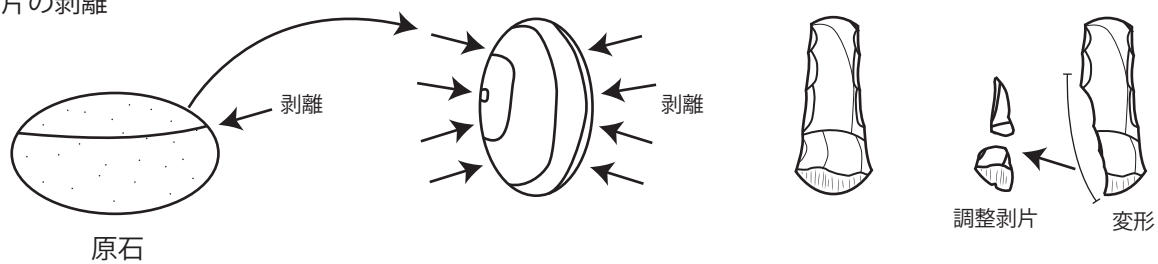
写真1 川岸遺跡出土の斧形石器

①原石の入手と素材  
剥片の剥離

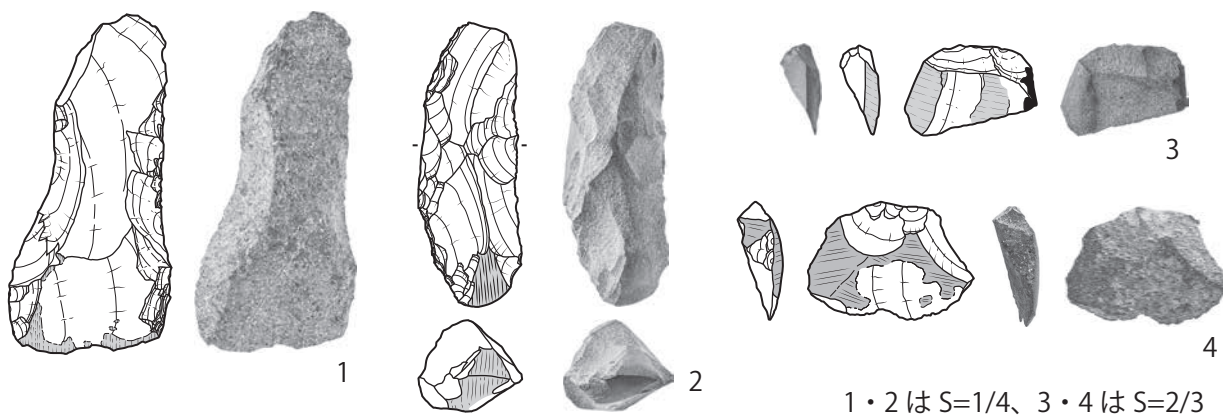
②素材剥片の加工

③整形・研磨

④使用・再生



第3図 斧形石器製作の概念図



1・2はS=1/4、3・4はS=2/3

第4図 川岸遺跡の斧形石器および関連資料（抜粋）

# 川岸遺跡の人々の生活・活動エリア

東京都埋蔵文化財センター 加藤 秀之

## 1 はじめに

川岸遺跡の1群では、石器2,112点、礫2,005点の遺物と、炭化物片1,193点が検出されました。これらは、石器は30カ所、礫は27カ所、炭化物は11カ所の集中部が設定され、平面分布と接合関係から北側環状ブロック群と南側環状ブロック群の2つの環状ブロック群が認識されました。

北・南の環状ブロック群は、立川ロームⅨ層段階の同一文化層として認識されましたが、石器・礫ともにそれぞれでの接合関係は多数確認されたものの北・南間での接合は一例もないこと、炭化物の放射性年代測定の結果から年代差があることから、同時性は低いものと理解されます。このことから、ブロック群ごとに、石器・礫・炭化物の分布を見ていくこととします。

## 2 北側環状ブロック群

①石器集中部：石器1,604点、22の集中部が設定されました。石器集中部の分布でみると南北約40m、東西約45mの規模と環状ブロック群としては平均（25m程度）よりやや大型といえます。

集中部は、環状ブロック群の周りを取り囲む円環部に分布する集中部17カ所と中央部に分布する集中部5カ所があり、円環部の集中部のうち3カ所（1-20～22）はさらに外側に広がるような分布にも見えます。

石器の接合は、168個体580点が認められました。各個体別資料の接合数は、2点接合が最も多く100個体、3点接合が35個体、4点接合が18個体、5点接合が3個体と5点以内の接合が92.9%と少数での接合が多く、10点以上の接合は6個体で、最も多いのが接合資料No.1-54の76点でした。接合距離では集中部内で完結する3mの範囲内で接合するものが79資料・47.0%と最も多く、集中部内と隣接する集中部間での

接合となる0～5m内での接合になると101資料・60.1%になります。一方で10mを超える接合も38資料・22.6%あり、最長接合距離は接合資料No.1-203で集中部1-3と1-11間で接合した36.98mです。

②礫集中部：礫1,471点、20の集中部が設定されました。集中部は、石器集中部の円環部の分布に重なる集中部12カ所と中央部に分布する集中部8カ所があり、明瞭な集中部を形成しない礫の分布も環状ブロック群内に多数分布しています。

礫の接合は、64個体153点が認められました。各個体別資料の接合数は、2点接合が最も多く55個体で73.3%、最も多いのが7点での接合資料です。接合距離では集中部内で完結する3mの範囲内で接合するものが55資料・32.7%と集中部内とその周囲に分布する礫と接合資料が多いですが、接合距離が10mを超える接合も5個体あり、最長接合距離は接合資料No.レキ550で集中部1-18と集中部外東2間で接合した47.87mです。

③炭化物集中部：3カ所の集中部が確認されました。石器集中部と重なるもの（1-1）と、石器集中部とも礫集中部とも重ならない単独のもの（1-2・3）があります。規模は、南北3.2m・東西2.9mの集中部No.1-1が最大で炭化物は275点検出されました。

④石器・礫・炭化物の分布：石器接合資料をみると、長距離接合関係により北側環状ブロック群内の石器集中部の同時性を示しています。一部の接合資料（1-54・82など）を除き個体数は多いものの接合点数が5点以内の資料が多く集中的に剥片剥離作業が行われた状況を示していないことは、ブロック群内の石器の多くは廃棄（岡村1979）や二次廃棄物（田村2012）であり、石器集中部

は多様な行動の結果集積されたものといえそうです。

礫集中部は、石器集中部と同様に長距離接合により同時性を示しています。環央部の礫集中部には、被熱した0～50gの小礫（細片）のまとまりの外側に100g以上の礫が分布する傾向が見られます（1-5・7・8・10）。礫集中部は火の使用に関わるものであり（鈴木編2018ほか）、小礫のまとまりは火ハネ剥片で火処を、外側の大型礫は抜き取り、あるいは片付けを示すものかもしれません。火処そのものとされる炭化物集中部とは分布が全く重ならないことは、火の使用方法が異なることも考えられます。

### 3 南側環状ブロック群

①石器集中部：石器465点、7の集中部が設定されました。石器集中部の分布でみると南北約40m、東西約25m以上の規模で、南西側は調査区外まで分布します。

石器の接合関係は、43個体126点が認められました。各個体別資料の接合数は、2点接合が最も多く31個体、3点接合が5個体、4点接合が3個体、5点接合が1個体と5点以内の接合が93.0%と少数での接合が多く、10点以上の接合は19点接合の1個体（接合資料No.1-191）でした。接合距離では集中部内で完結する3mの範囲内で接合するものが26資料・60.5%と最も多く、集中部内と隣接する集中部間での接合となる0～5m内での接合になると32資料・74.4%になります。10mを超える接合は7資料・16.3%あり、最長接合距離は接合資料No.1-203で、集中部1-23・24・29間で接合した23.65mです。

②礫集中部：礫496点、7の集中部が設定されました。集中部は、石器集中部の円環部の分布に重なる集中部5カ所と中央部に分布する集中部2カ所があり、明瞭な集中部を形成しない礫の分布も環状ブロック群内に多数分布しています。

礫の接合関係は、9個体30点が認められました。各個体別資料の接合数は、2点接合が最も多

く5個体で55.5%、最も多いのが7点での接合資料です。接合距離では集中部内で完結する3mの範囲内で接合するものが7資料・77.8%と集中部内とその周囲に分布する礫と接合資料が多く、最長接合距離は接合資料No.レキ540で、集中部1-21内で接合した8.49mです。

③炭化物集中部：8カ所の集中部が確認されました。石器集中部と重なるもの（1-4）、石器集中部・礫集中部とも重なるもの（1-6・7・8）と、石器集中部・礫集中部とも重ならない単独のもの（1-5・9・10・11）があります。規模は、南北3.4m・東西3.2mの集中部No.1-が最大で炭化物は179点検出されました。

④石器・礫・炭化物の分布：石器接合資料をみると、長距離接合関係により南側環状ブロック群内の石器集中部の同時性を指摘できます。そして接合点数が5点以内の資料がほとんどであり集中的に剥片剥離作業が行われた状況を示していないことは、ブロック群内の石器の多くは廃棄や二次廃棄物であり、北側と同様に石器集中部は多様な行動の結果集積されたものといえそうです。

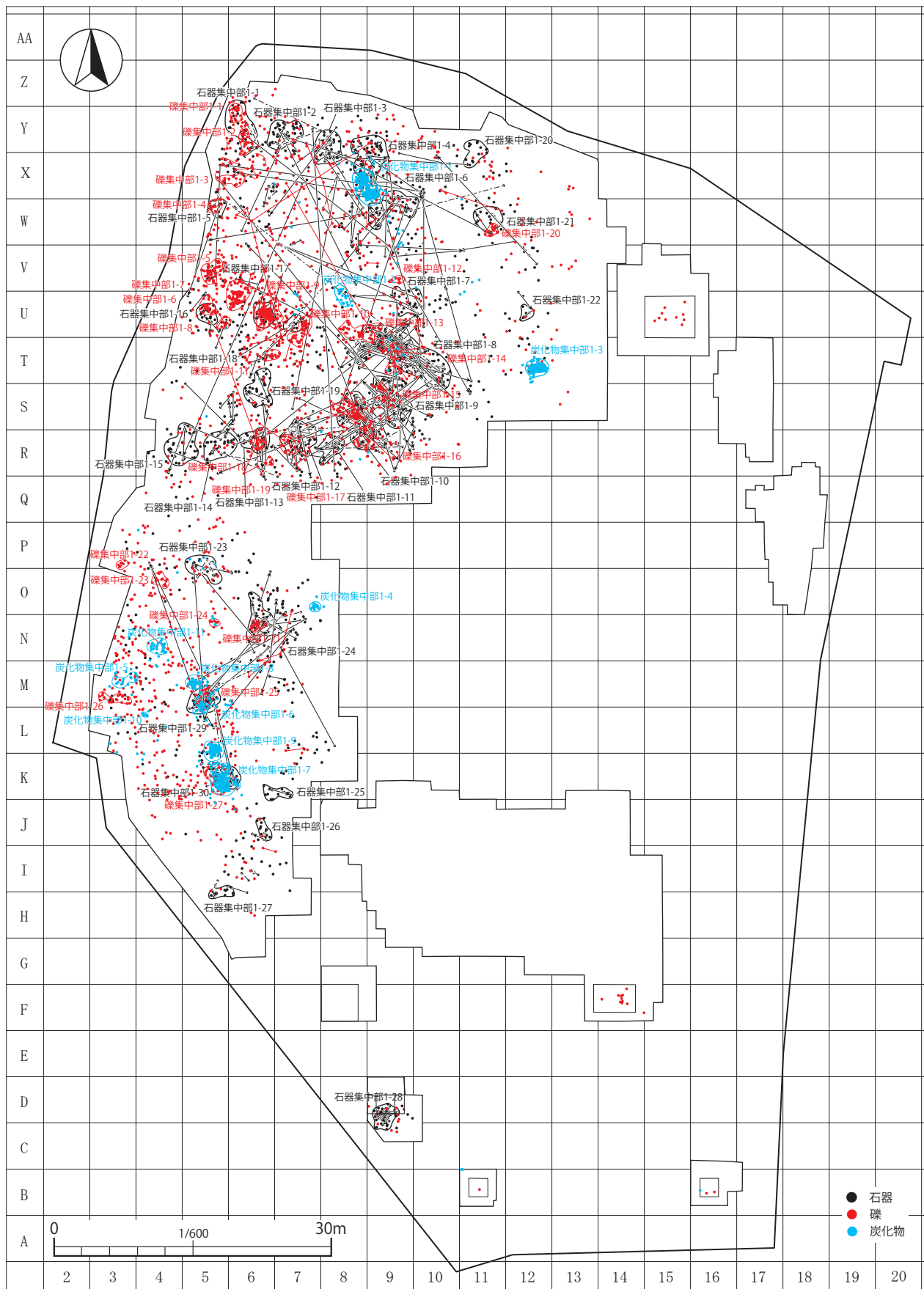
礫集中部は円環部と中央部それぞれに分布しますが、炭化物集中部は8カ所のうち7カ所が中央部に分布し、中央部では石器・礫・炭化物が全て重なる集中部が2カ所分布しています。

### 4 おわりに

ここでは、接合関係を中心にみてきましたが、石器では石器型式別・石材別などの分布、礫集中部の炭化物集中部の重なる分布と重ならない分布の違いなどは検討できませんでした。

川岸遺跡の環状ブロック群は、石器集中部だけで構成される通常の環状ブロック群とは異なり、旧石器時代の主要遺構・遺物である石器・礫・炭化物集中部が揃っています。これらを含めて更に分析していくことで環状ブロック群の内容をより明らかにすることができるといえます。

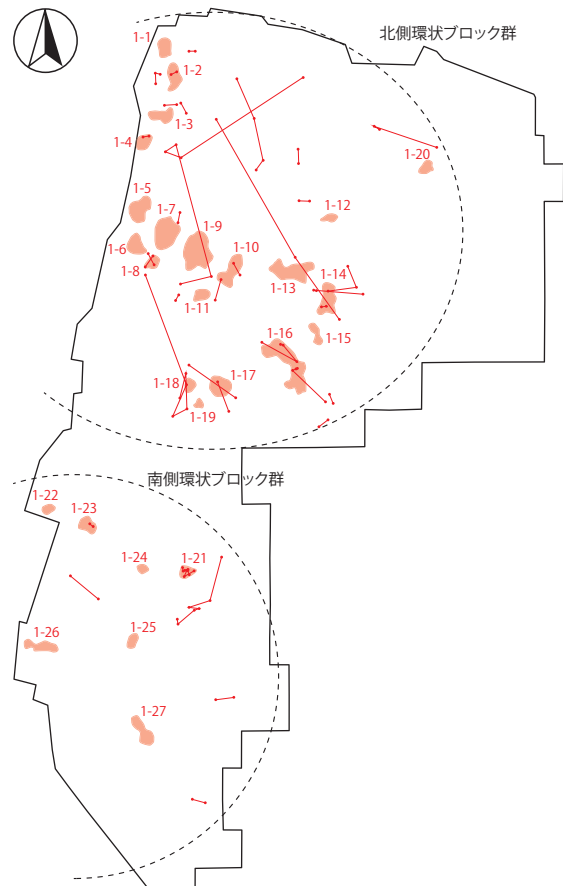
（紙幅の関係で参考文献は省略しました）



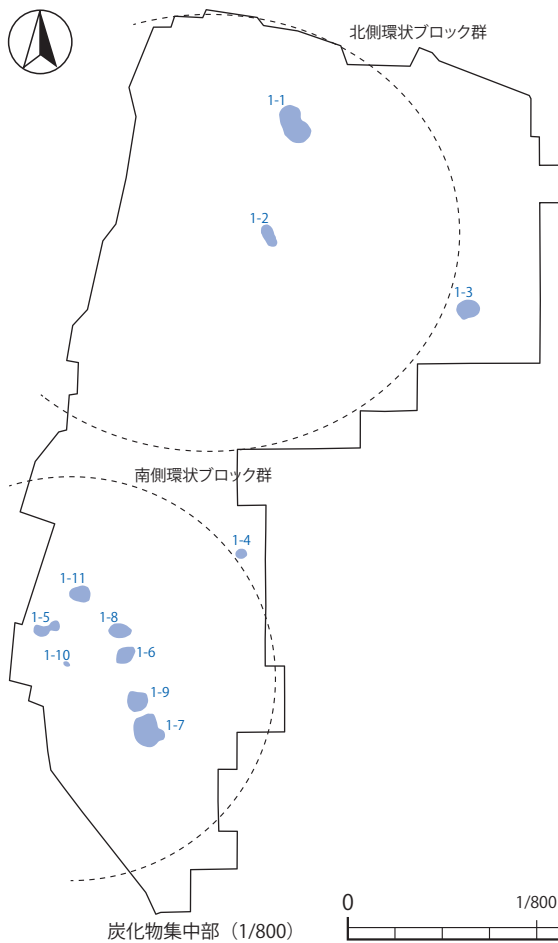
第1図 川岸遺跡における石器・礫・炭化物分布図 (1/600)



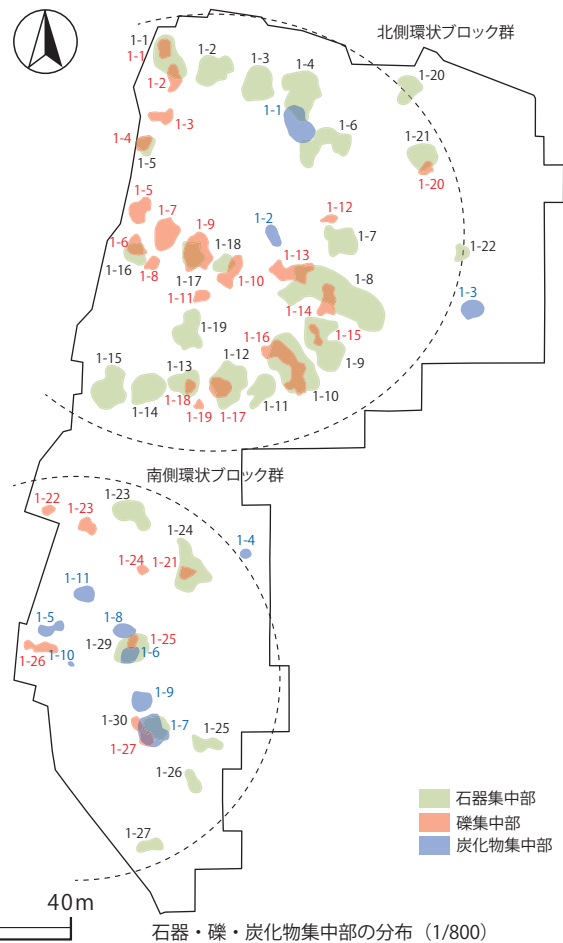
石器集中部と接合関係図 (1/800)



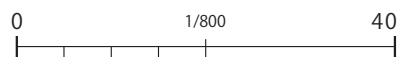
礫集中部と接合関係図 (1/800)



炭化物集中部 (1/800)



石器・礫・炭化物集中部の分布 (1/800)



第2図 川岸遺跡における石器・礫・炭化物集中部の分布 (1/800)

発表 2

# 川岸遺跡の人々が利用した石器石材

東京都埋蔵文化財センター 間 直一郎

## 1 はじめに

本稿では、川岸遺跡の環状ブロック群から出土した石器石材の種類やその割合に注目しながら、環状ブロック群を形成した人々の石材利用に関する特徴を探っていきます。

## 2 南北環状ブロック群の石材組成

川岸遺跡の1群石器群のうち、北側環状ブロック群の石器1,601点<sup>\*1</sup>には、チャート(24.5%)、珪質頁岩(23.1%)、黒曜石(12.7%)、安山岩(9.7%)、頁岩(9.6%)、凝灰岩(8.5%)、ホルンフェルス(5.3%)、砂岩(2.1%)、硬質頁岩(1.8%)、玉髓(1.8%)、水晶(0.4%)、粘板岩(0.2%)、緑色片岩(0.1%)、計13種類が利用されています。一方、南側環状ブロック群の石器432点<sup>\*2</sup>には、安山岩(41.7%)、チャート(19.7%)、珪質頁岩(14.8%)、頁岩(7.6%)、黒曜石(7.6%)、玉髓(4.9%)、ホルンフェルス(1.6%)、凝灰岩(1.2%)、砂岩(0.9%)、計9種類が使われています(表1)。これらの石材がどこで手に入るのか、代表的な産地を紹介します<sup>\*3</sup>。

チャート・ホルンフェルス・砂岩・粘板岩は、荒川・多摩川水系などで採取が可能です。

緑色片岩は三波川変成帯に含まれる岩石で、埼玉県秩父に産地があり、荒川流域で採取できます。

珪質頁岩・頁岩も荒川・多摩川水系で採取可能

ですが、良質な石材の入手は容易ではないと考えられています。また、群馬県に源を発する利根川流域や千葉県房総半島南部、東北地方にも産地が分布しています。なお、川岸遺跡の硬質頁岩は、東北地方に産するものと似た特徴を示しているため、東北方面から持ち込まれたと推測されます。

安山岩は埼玉県・山梨県・群馬県・長野県にわたって広がる奥秩父など、ガラス質黒色安山岩は神奈川県箱根や長野県八風山、栃木県姿川・武子川、群馬県利根川などで採取できます。

黒曜石は産地推定の結果、長野県和田・諏訪・神奈川県箱根畑宿・鍛冶屋、静岡県天城、伊豆諸島神津島のものが確認されています。北側環状ブロック群では天城柏峠産、南側環状ブロック群では箱根畑宿産が最も多く出土しています。

水晶も産地推定が実施されており、山梨県竹森鉦床のものが確認されています。

凝灰岩<sup>\*4</sup>は神奈川県丹沢に産地があります。

玉髓は、性質的にほぼ同じ鉱物であるメノウが茨城県を流れる那珂川・久慈川などで採取できるため、その周辺地域に産地があると考えられます。

各石材の産地を踏まえて、南北2つの環状ブロック群の石材組成から、それらを形成した人々の石材利用の特徴を探ると、北側環状ブロック群は、チャートやホルンフェルスなどを採取できる川岸遺跡の近傍から、黒曜石や凝灰岩などが手に入る

第1表 南北環状ブロック群の石材組成

	チャート	珪質頁岩	安山岩	黒曜石	頁岩	凝灰岩	ホルンフェルス	玉髓	硬質頁岩	水晶	砂岩	緑色片岩	粘板岩	不明	合計
北側環状ブロック群	392 (24.5)	370 (23.1)	156 (9.7)	203 (12.7)	153 (9.6)	136 (8.5)	85 (5.3)	29 (1.8)	29 (1.8)	7 (0.4)	34 (2.1)	1 (0.1)	3 (0.2)	3 (0.2)	1601 (100.0)
南側環状ブロック群	85 (19.7)	64 (14.8)	180 (41.7)	33 (7.6)	33 (7.6)	5 (1.2)	7 (1.6)	21 (4.9)			4 (0.9)				432 (100.0)

※枠内上段は点数、下段括弧内は%を示しています

ような遠隔地までを行動域として<sup>\*5</sup>、各地から幅広い種類の石材を集め、それらを特定の石材に大きく偏ることなく利用している点が特徴と言えます。南側環状ブロック群も、行動域の大枠は北側と似ていたと推測されますが、安山岩に偏った石材組成を示しているため、安山岩やその産地に対する志向の強さが特徴と考えられます。環状ブロック群を総体的に捉えて石材組成を調べると、南北でこのような特徴や違いが見えてきます。

### 3 個々の石器集中部の石材組成

北側環状ブロック群は石器集中部 1-1～22、南側環状ブロック群は石器集中部 1-23～27・29・30 から構成されていますが、これらはどのような石材組成を示しているのでしょうか。特に、環状ブロック群を総体的に捉えた際に見られる特徴が、個々の石器集中部にも共通して現れるのか、あるいはそれと異なる特徴を示す石器集中部も存在するののかという点は、環状ブロック群を形成した人々がどこからやってきたのか考える上で重要な視点となります。そこで、石器集中部ごとの石材組成を調べたところ、以下のような特徴が明らかになりました（表2）。

1-1 は凝灰岩の割合が最多を占めますが、チャート・頁岩・珪質頁岩・安山岩もほぼ同じ点数が出土しているため、特定の石材に偏らず、幅広い種類の石材を利用していた様子を読み取れます。

1-2・3・5～7・15・16・21・23・25 は珪質頁岩の割合が最多を占めます。これらの多くでは珪質頁岩以外の石材も一定程度利用されていますが、1-7・15 では珪質頁岩が集中部の 40%以上を占めており、その他の石材の割合は相対的に低くなっています。このような割合の差には、石器集中部を形成した人々の、珪質頁岩やその産地に対する志向の強さの違いが現れているのかもしれない。また、1-6 では珪質頁岩に次いで硬質頁岩が出土しており、1 群で出土した硬質頁岩

29 点のうち 23 点がここから出土していることを踏まえると、特殊な石材組成と言えます。

1-4・8・14・20・22・27・28・30 はチャートの割合が最多です。このうち 1-8 はチャートが 50%以上、1-28・30 は 70%以上を占めているため、これらを形成した人々はチャートへの志向が強かったと見られます。

1-9・12・17～19 は黒曜石の割合が最多です。特に 1-12 は 40%以上を黒曜石が占めており、偏った石材利用を示しています。

1-10・24・29 は安山岩の割合が最多です。1-24 は集中部の 50%以上、1-29 は 80%以上を安山岩が占めており、どちらからも安山岩に偏った石材利用をしていた様子が窺えます。

1-11・13・26 は頁岩の割合が最多ですが、それ以外の石材も一定程度出土しているため、複数種類の石材が幅広く利用されていた様子です。

### 4 石材組成の特徴の比較

環状ブロック群については、石器石材の交換の場と考える向きもあるため、個々の石器集中部の石材組成が、それを形成した人々の行動域のみを反映しているとは限りません。しかし、石材の交換が行われていたとしても、その対象は一部に限られると考えられていますので、石材組成から人々の行動域を窺い知ることある程度可能と言えます。この前提の下で、石材組成の特徴について、環状ブロック群を総体的に捉えた場合と、石器集中部を個別に見た場合とを比較してみます。

北側環状ブロック群の石材組成については、チャートなどの近傍石材から、黒曜石などの遠隔地石材まで、特定の石材に大きく偏ることなく、各地の石材が幅広く利用されている点が特徴でしたが、1-1～1-22 の全てにそういった特徴が見られる訳ではありませんでした。例えば、1-7・15 は珪質頁岩、1-8 はチャート、1-12 は黒曜石に偏った利用が見受けられるため、これらを形成し

第2表 川岸遺跡の南北環状ブロック群を構成する各石器集中部の石材組成

	チャ イト	珪 質 頁 岩	安 山 岩	黒 曜 石	頁 岩	凝 灰 岩	フ ェ ル ン ス	玉 髓	硬 質 頁 岩	水 晶	砂 岩	緑 色 片 岩	粘 板 岩	不 明	合 計
北 側 環 状 ブ ロ ッ ク 群 の 石 器 集 中 部	1-1	8 (19.0)	7 (16.7)	6 (14.3)	3 (7.1)	8 (19.0)	9 (21.4)				1 (2.4)				42 (100.0)
	1-2	8 (17.0)	10 (21.3)	4 (8.5)	4 (8.5)	8 (17.0)	9 (19.1)	2 (4.3)	1 (2.1)		1 (2.1)				47 (100.0)
	1-3	5 (9.6)	13 (25.0)	3 (5.8)	6 (11.5)	6 (11.5)	8 (15.4)	9 (17.3)	2 (3.8)						52 (100.0)
	1-4	20 (21.1)	14 (14.7)	11 (11.6)	18 (18.9)	11 (11.6)	3 (3.2)	9 (9.5)	3 (3.2)		1 (1.1)	4 (4.2)		1 (1.1)	95 (100.0)
	1-5	21 (26.6)	22 (27.8)	2 (2.5)	5 (6.3)	15 (19.0)	5 (6.3)	3 (3.8)		3 (3.8)		2 (2.5)	1 (1.3)		79 (100.0)
	1-6	17 (14.7)	35 (30.2)	14 (12.1)	4 (3.4)	10 (8.6)	7 (6.0)	1 (0.9)	1 (0.9)	23 (19.8)		4 (3.4)			116 (100.0)
	1-7	14 (26.9)	24 (46.2)	3 (5.8)		3 (5.8)	2 (3.8)		1 (1.9)	1 (1.9)		4 (7.7)			52 (100.0)
	1-8	136 (52.1)	88 (33.7)	4 (1.5)	7 (2.7)	10 (3.8)	9 (3.4)	4 (1.5)	1 (0.4)		1 (0.4)	1 (0.4)			261 (100.0)
	1-9	19 (15.4)	29 (23.6)	11 (8.9)	37 (30.1)	6 (4.9)	15 (12.2)	3 (2.4)	1 (0.8)			2 (1.6)			123 (100.0)
	1-10	34 (23.4)	11 (7.6)	43 (29.7)	1 (0.7)	8 (5.5)	8 (5.5)	38 (26.2)				2 (1.4)			145 (100.0)
	1-11	5 (13.2)	10 (26.3)	3 (7.9)	2 (5.3)	11 (28.9)	5 (13.2)	1 (2.6)						1 (2.6)	38 (100.0)
	1-12	6 (7.0)	15 (17.4)	3 (3.5)	36 (41.9)	9 (10.5)	13 (15.1)	1 (1.2)				1 (1.2)		2 (2.3)	86 (100.0)
	1-13	7 (15.9)	7 (15.9)	7 (15.9)	4 (9.1)	12 (27.3)	4 (9.1)		1 (2.3)			2 (4.5)			44 (100.0)
	1-14	19 (30.2)	9 (14.3)	15 (23.8)	2 (3.2)	8 (12.7)	6 (9.5)		2 (3.2)		2 (3.2)				63 (100.0)
	1-15	2 (4.2)	22 (45.8)	1 (2.1)	10 (20.8)	4 (8.3)	4 (8.3)	1 (2.1)	1 (2.1)		1 (2.1)	2 (4.2)			48 (100.0)
	1-16	11 (23.4)	14 (29.8)	1 (2.1)	11 (23.4)	1 (2.1)	9 (19.1)								47 (100.0)
	1-17	6 (15.4)	3 (7.7)	3 (7.7)	14 (35.9)	2 (5.1)	2 (5.1)		6 (15.4)			3 (7.7)			39 (100.0)
	1-18	9 (19.6)	7 (15.2)	6 (13.0)	11 (23.9)	5 (10.9)	4 (8.7)		3 (6.5)		1 (2.2)				46 (100.0)
	1-19	20 (30.8)	3 (4.6)	6 (9.2)	22 (33.8)	5 (7.7)	1 (1.5)	2 (3.1)	1 (1.5)		1 (1.5)	2 (3.1)		2 (3.1)	65 (100.0)
	1-20	7 (23.3)	7 (23.3)	2 (6.7)	1 (3.3)	5 (16.7)	3 (10.0)	4 (13.3)	1 (3.3)						30 (100.0)
	1-21	8 (17.4)	11 (23.9)	2 (4.3)	4 (8.7)	5 (10.9)	2 (4.3)	8 (17.4)	2 (4.3)	1 (2.2)		3 (6.5)			46 (100.0)
	1-22	10 (27.0)	9 (24.3)	6 (16.2)	1 (2.7)	1 (2.7)	8 (21.6)	1 (2.7)	1 (2.7)						37 (100.0)
南 側 環 状 ブ ロ ッ ク 群 の 石 器 集 中 部	1-23	11 (21.2)	15 (28.8)	11 (21.2)	4 (7.7)	6 (11.5)	1 (1.9)	1 (1.9)			3 (5.8)				52 (100.0)
	1-24	9 (6.2)	20 (13.8)	77 (53.1)	18 (12.4)	10 (6.9)	2 (1.4)		8 (5.5)		1 (0.7)				145 (100.0)
	1-25	7 (20.6)	13 (38.2)	3 (8.8)	2 (5.9)	3 (8.8)	1 (2.9)	1 (2.9)	4 (11.8)						34 (100.0)
	1-26	4 (20.0)	5 (25.0)	1 (5.0)	2 (10.0)	7 (35.0)			1 (5.0)						20 (100.0)
	1-27	9 (24.3)	8 (21.6)	2 (5.4)	7 (18.9)	2 (5.4)	1 (2.7)		8 (21.6)						37 (100.0)
	1-29	6 (6.4)	1 (1.1)	82 (87.2)		3 (3.2)		2 (2.1)							94 (100.0)
	1-30	39 (78.0)	2 (4.0)	4 (8.0)		2 (4.0)		3 (6.0)							50 (100.0)
他 の 集 中 部 外	1-28	42 (75.0)	10 (17.9)					4 (7.1)							56 (100.0)
	合計	14 (42.4)	5 (15.2)	3 (9.1)	4 (12.1)	3 (9.1)	2 (6.1)	2 (6.1)							33 (100.0)
合計	533 (25.1)	449 (21.2)	339 (16.0)	240 (11.3)	189 (8.9)	143 (6.7)	94 (4.4)	54 (2.5)	29 (1.4)	7 (0.3)	38 (1.8)	1 (0.0)	3 (0.1)	3 (0.1)	2122 (100.0)

※枠内上段は点数、下段括弧内は%を示しています

た人々は、それぞれの石材が採れる地域を主な行動域としていたと推測されます。また、1-6は硬質頁岩の割合が比較的高いため、東北地方との関わりが深い集団によって形成された可能性が指摘できます。その他の石器集中部からは、特定の地域に対する志向は読み取りにくいのですが、少なくとも、各石器集中部を形成した人々の行動域は一様ではなく、様々な方面から川岸遺跡に集まってきたと考えられます。

また、南側環状ブロック群は安山岩に偏った石材組成が特徴ですが、1-23～27・29・30のうち、そのような特徴を示すのは1-24・29のみです。1-24・29の形成には、安山岩の産地周辺を主な行動域とする人々が関わったと考えられますが、他の石器集中部では、チャートや珪質頁岩などが高い割合を占めるため、北側と同様に、行動域の異なる人々が集まっていたと考えられます。

## 5 おわりに

川岸遺跡の環状ブロック群の石材組成を総体的に見たことで、遺跡にいた人々の行動域の大枠を把握できました。また、個々の石器集中部にも焦点を当てたことで、環状ブロック群を形成した人々の行動域を、より個別具体的にイメージすることもできました。今後、川岸遺跡と周辺遺跡の環状ブロック群や、それを構成する石器集中部、あるいは単独で見つかった石器集中部に注目しながら石材組成を比較すれば、川岸遺跡と他遺跡の共通点や、川岸遺跡ならではの石材利用に関する特徴の発見に繋がるかもしれません。

### 註

- ※1 石器集中部 1-1～22、及びその周辺から出土した石器を集計しています。
- ※2 石器集中部 1-23～27・29・30、及びその周辺から出土した石器を集計しています。
- ※3 黒曜石と水晶以外は、産地推定の結果を掲載してい

る訳ではありません。そのため例えば、川岸遺跡から出土したチャートの中に、遠隔地のものが含まれている可能性や、安山岩の中に近傍で入手されたものが含まれている可能性がある点には注意が必要です。

- ※4 凝灰岩としている資料の中には、前嶋（2025）が紹介している「緑色岩」が含まれている可能性があります。
- ※5 伊藤（2025）の「石材は一日の行動圏内で採取できる近傍石材と、移動・採取に二日以上の行程を要すると考えられる遠隔地石材に分けられよう。」との記述を参考にしています。遠隔地が指す距離は研究者によって定義が異なりますが、ここでは山田（2012）で紹介されている先行研究を参考に、30kmを遠隔地かどうかの判断基準とします。

### 参考文献

- 伊藤 健 2025『後期旧石器時代の新たな遺跡構造論 東京の遺跡を中心に』 新泉社 58-60頁
- 諏訪間順・野口 淳・島立 桂 2010「関東地方南部」『講座日本の考古学 1 旧石器時代（上）』 稲田孝司・佐藤宏之編集 青木書店 381-437頁
- 東京都埋蔵文化財センター 2024『東京都埋蔵文化財センター調査報告 第387集 川岸遺跡（第1分冊・第2分冊・第7分冊）』
- 前嶋秀張 2025「緑色凝灰岩および緑色岩を使用した石斧の分布と産地の調査」『シンポジウム 関東・東海地方の旧石器時代の現在 予稿集』 石器文化研究会編集 112-113頁
- 山田昌功 2012「石材産地研究にかんするノート - ヨーロッパの後期旧石器時代を素材に -」『資源環境と人類』 明治大学黒曜石研究センター編集 第2号 37-48頁

## 川岸遺跡の人々の石器を作る技

東京都埋蔵文化財センター 塚田 清啓

### 1 はじめに

旧石器時代の遺跡には、様々な種類の石器が残されています。それらは、河川などで拾われた原石からすぐさま作られていたわけではありません。原石を敲き割って生じた破片（以下、剥片）から、作りたい石器に適した剥片（以下、素材）を選択し、その細部を加工することで完成品へと仕上げられます。この一連の工程で重要なポイントは、素材となる剥片を如何にして原石から得るかということです。良質な原石が入手できても、敲く技術がなければすべて台無しだからです。特に、素材となる剥片を生み出す技術は剥片剥離技術と呼ばれ、最も基本的な技術であり、様々な石器はその技術に支えられて作られています。その剥片剥離技術を読み解くことは、遺跡の性格やその時代の社会的特徴を捉えることに繋がります。

では、川岸遺跡にはどのような剥片剥離技術があるのでしょうか。そして、川岸遺跡と同様に環状ブロック群とされる他の遺跡でも、同じ技術がみられるのでしょうか。本テーマでは、川岸遺跡とほか2遺跡の事例を比較し、川岸遺跡の特徴をみていきます。

### 2 川岸遺跡と類似遺跡の剥片剥離技術

剥片剥離技術を読み解くためには、剥片剥離が行われた工程と、工程の中に組み込んで用いられる調整技術の有無を知る必要があります。今回は、3遺跡の接合資料を対象に、各遺跡の剥片剥離技術を取り上げます。

#### (1) 川岸遺跡（東久留米市）

出土石器には、台形様石器、ナイフ形石器、彫器、搔器、削器、錐形石器、楔形石器、斧形石器、石核、石刃、剥片、敲石、台石などがあります。

主に剥片を素材とする剥片石器を主体としています。接合資料の剥片剥離は、多方向から打ち割るものや連続剥離により剥片を得るものが認められますが、後者の方が強い傾向にあります。細かな調整技術は、若干あるものの多用している様子はなく、剥離工程に分割技術を比較的多く取り入れています。斧形石器の素材となるような大形の剥片は作られていませんが、それ以外の剥片石器の素材を得る技術が認められます。

#### (2) 多間寺前遺跡（東久留米市）

出土石器には、ナイフ形石器、削器、錐、斧形石器、石核、剥片、敲石などがあり、剥片石器が主体です。接合資料の剥片剥離では、打ち割る方向を頻繁に変えながら単発的に剥片を得ていく方法が主体です。稀に連続的な剥離も見られますが、剥片の形状は安定していません。調整技術はほぼ認められず、分割技術が少し確認される程度です。接合資料や単独の剥片と完成された石器との強い結びつきはありません。

#### (3) 田無南町遺跡（西東京市）

出土石器には、ナイフ形石器、彫器、角錐状石器、錐、スクレイパー、刃部磨製石斧、石核、石刃、剥片、敲石などがあります。石器の構成は前2遺跡と同様で剥片石器が主体です。接合資料はあまりなく、単独出土の石核が確認対象となりますが、縦長剥片を剥離するための石核と横長剥片を剥離するための石核の2タイプが確認されています。前者は単一打面からの連続剥離、後者は多方向からの剥離が行われています。また、作業面再生、打面再生は行われていますが、細かな調整はありません。認められる技術的な要素は少ないものの、石核資料からは完成された石器の素材に対応する剥片が得られていたと推測されます。

3遺跡の剥片剥離技術を総括的に捉えると、接合資料と完成石器との関係性以外は、あまり違いが見られません。

### 3 接合資料の分布範囲の類型化

では、3遺跡ともに同じような性格なのでしょう。あるいは、もっと動的に読み取れることはできないのでしょうか。ここでは、接合資料の分布の在り方からどのような技術の様相が浮き出るのか、接合する石器の分布の範囲（以下、接合範囲）を視覚的に捉え、類型化を試みました<sup>1)</sup>。

A類（近距離接合型）：接合範囲が、おおよそ10m四方内に収まるもの。1箇所のブロック内に収まるものを基本とし、ブロック外へ分布が伸びていたとしても隣接のブロックまでにしか範囲は及ばない。

B類（遠距離接合型）：接合範囲の最端に位置する2点間の距離が、10m以上離れているもの。また、接合範囲の軸や広がりから、さらに3つの類型に分類される。

B1類（遠距離隣接型）：環状ブロックの環に沿うように接合範囲の長軸方向が概ね揃うもの。横並びの隣接ブロックを2個以上またぐものがある。

B2類（遠距離対向型）：環状ブロックの中心方向または接合関係にあるブロック同士が隣接ではなく対向するもの。あるいは、B1類の長軸と概ね90度直交するもの。

B3類（遠距離広範囲型）：接合関係が隣接ブロックおよび環状ブロックの中心方向にも広がり、接合範囲が広範囲に及ぶもの。

第1表 接合範囲類型別

遺跡	A類	B類	B1類	B2類	B3類
川岸（北）(55)	37	18	8	7	3
川岸（南）(10)	5	5	2	2	1
多聞寺前(31)	29	2		2	
田無南町(5)	4	1	1		
類型別計(101)	75	26	11	11	4

### 4 接合範囲類型別の剥片剥離技術とまとめ

A類は、ほぼブロックの範囲とも重なりること

から総括的な様相と変わりはありません。一方、B類は環状ブロック内でかなり長い距離を移動し、分布していることが一目瞭然です。また、3遺跡の中で活発な移動が認められるのは、川岸遺跡です。川岸遺跡のB類の細分では、B1類は縦長剥片を連続剥離する接合個体が主体です。B2類は、礫面のある剥片の接合が主体で、原石の荒割あるいは石核を成形する段階の接合資料と捉えられる資料です。そして、最も広範囲に分布するB3類は、連続して縦長剥片を作り出す資料が主体である点はB1類と同じですが、接合点数も比較的多く、長さも一定している点が特徴です。

ナイフ形石器をはじめ、縦長剥片が素材としての有用性が高いことは、完成された石器の点数からも分かります。ただその状況は、今回の検討により、縦長剥片の連続剥離資料の移動性が高いことによって裏付けられ、各地点の作業場所で利用頻度が高かったからこそと考えられます。また、連続剥離された資料が広範囲な広がりをもつことは、環状ブロック群が一時期に同時形成したということも示唆しているのではないのでしょうか。

### 5 おわりに

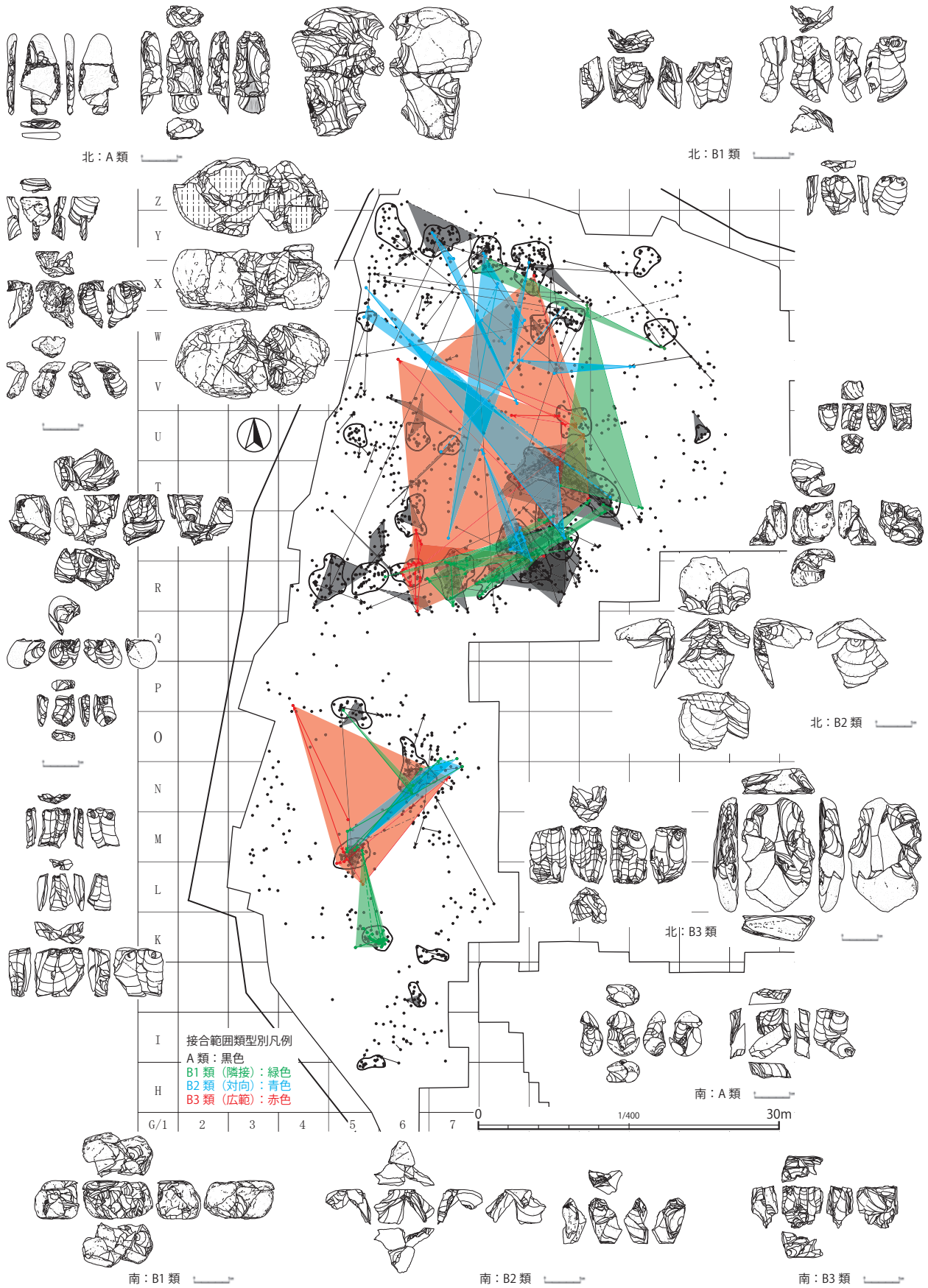
今回の類型化による試みは、まだ多くの課題が残されています。しかし、技術と範囲を組み合わせることで俯瞰的な見方をすることにより、遺跡内の行動をより動きあるものとして捉えることができると思います。また、川岸遺跡は数ある遺跡の中でも情報量が豊富であることから、様々な検討の起点になりうる重要な遺跡であると考えられます。

#### 註

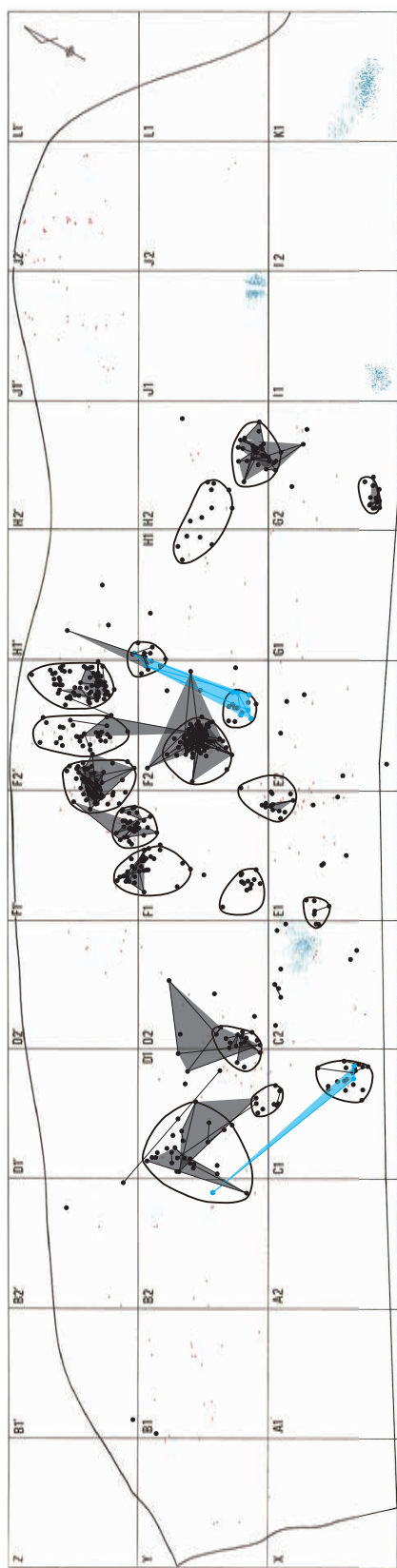
1 範囲として表すため3点以上の接合資料を対象に、出土位置で最も外側に位置する地点を線でつなぎました。

#### 参考文献

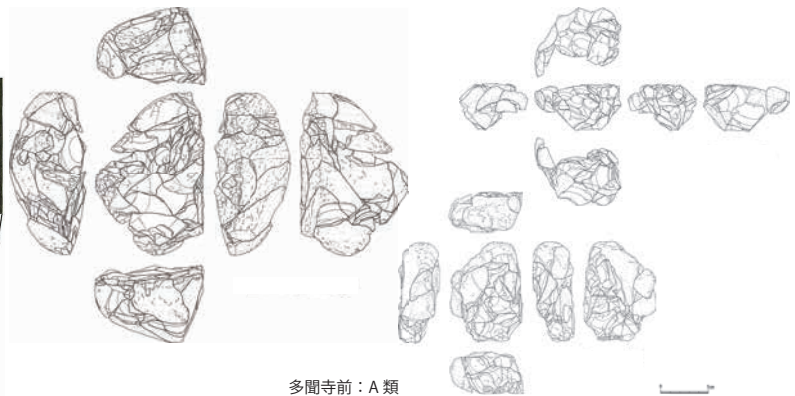
都立学校遺跡調査会 1992『田無南町 都立無養護学校内埋蔵文化財発掘調査報告書』  
東京都建設局・多聞寺前遺跡調査会 1983『多聞寺前遺跡Ⅱ』



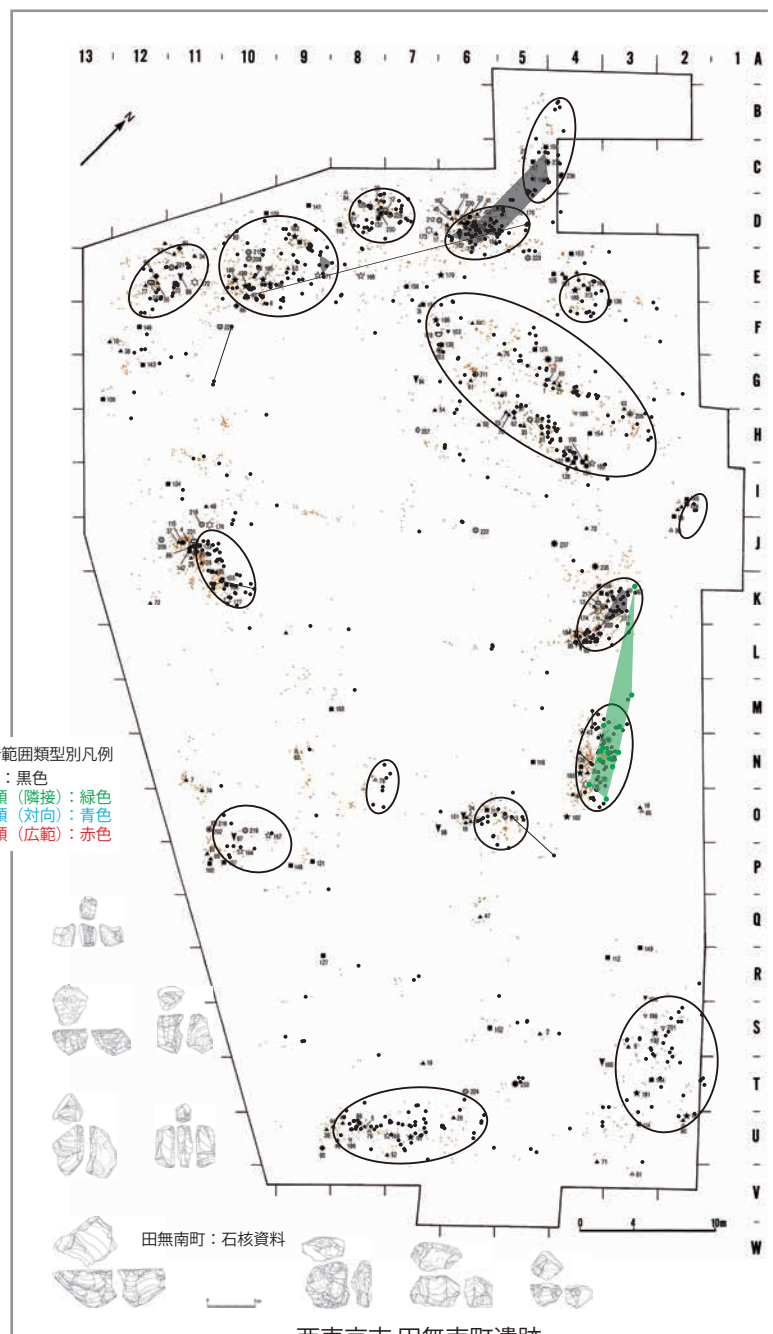
第1図 川岸遺跡の接合資料と類型別分布範囲



東久留米市 多間寺前遺跡



多間寺前：A類



接合範囲類型凡例  
 A類：黒色  
 B1類（隣接）：緑色  
 B2類（対向）：青色  
 B3類（広範）：赤色

田無南町：石核資料

西東京市 田無南町遺跡

第2図 比較対象遺跡の接合資料・個体資料と類型別分布範囲

## 川岸遺跡の人々の狩猟具

東京都埋蔵文化財センター 堀 恭介

### 1 狩猟具について

狩猟具とは、字のごとく狩りに使用し獲物を捕獲するための道具です。遺跡からは、木や骨角といった有機物は数万年の年月を経て分解されてしまい残されず石を素材として作られた道具である石器と礫だけが出土します。この石器の一部に槍先などの先端部として考えられるものが出土します。

### 2 狩猟具についての研究

これらの石器が実際に狩猟具として使われていたのかについて、明らかにする研究が2000年代以降、精力的に行われてきました。

石器には、使用した時についたキズや破損といった痕跡が残されていることが有ります。こうしたキズや破損をパターン化し石器の機能を推定する研究を石器使用痕分析と言います。そして、石器には指標的衝撃剥離（佐野 2011）という狩猟によって発生する特徴的な破損が認められることが有ります。レプリカを作成し実験などを行い、このような破損がどのように出来て、実際の石器に残されているのかを調べることで、狩猟具としての機能が実際にあったことが、徐々に明らかになってきました。そして、近年では関東地方でも同様の痕跡の存在が報告され（岩瀬 2018、鈴木 2024、戸塚 2025、御堂島 2023、山岡 2019）、この時期の人々の狩猟行動についての議論を行うための資料の蓄積が進んできています。

### 3 川岸遺跡から出土した狩猟具の時期

川岸遺跡を残した人々がいた時期に狩猟具として使われたと考えられる石器に、台形様石器とナイフ形石器が有ります。これらの石器は、先端部が

尖っていたりする形態の特徴から刺突の機能をもった道具と推定されてきました。台形様石器は小型の剥片を、ナイフ形石器は石刃や縦長剥片を素材として、部分的に加工を加えて尖頭部や刃部を作り出しています。

東京都と埼玉県の一部に広がる武蔵野台地に堆積する立川ローム層中から後期旧石器時代の遺物は出土します。後期旧石器時代は前半期と後半期に分けられます。その内、前半期の遺物は約 36,000～30,000 年前に堆積した立川ローム X～VII 層にかけての地層が該当します。前述した、台形様石器は約 36,000～31,000 年前にかけて、前半期の終わりごろまで使われていましたが、それ以後は断絶してしまいます。この台形様石器は X 層では小型の剥片にやや粗雑な加工を加えて作られていましたが、IX 層になると基部を丁寧に作り出し形が整うものが見られるようになります。ナイフ形石器は X 層と IX 層以降で素材となる石刃技法の違いや加工部位によって大きく変化し、大まかに基部加工を主体とする X 層期から、基部加工のものに加えて二側縁加工や一側縁加工といった背部加工のものが加わり、加工方法が多様化する IX 層以降への変化が見られます（堀 2018）。

川岸遺跡の環状ブロック群から出土した狩猟具は、こうした IX 層の時期の特徴を良く表していると考えられます。ここでの発表では、川岸遺跡から出土した狩猟具と思われる石器に残された痕跡に注目し他の同時期の環状ブロック群の遺跡から出土した資料と比較して、その特徴について検討したいと思います。

### 4 川岸遺跡から出土した狩猟具

川岸遺跡の 1 群（IX b 層を主体とする石器群）

からは、狩猟具はナイフ形石器 41 点、台形様石器 11 点が出土しています。その内、北側環状ブロック群からナイフ形石器 35 点（基部加工 26 点、背部加工 9 点）、台形様石器 8 点、南側環状ブロック群からはナイフ形石器 6 点と台形様石器 1 点が出土し、そして集中部外からは台形様石器 1 点が出土しています。狩猟具が加工具を含めた道具全体に占める割合では、北側環状ブロック群では、56.6%（狩猟具 43 点、加工具 33 点）、南側環状ブロック群では 77.8%（狩猟具 7 点、加工具 2 点）となります。

武蔵野台地における同時期の環状ブロック群の遺跡と比較すると、野水遺跡第 1 地点第 4 文化層 30.8%（狩猟具 12 点、加工具 27 点）、鈴木遺跡鈴木 10 文化層 39.2%（狩猟具 20 点、加工具 31 点）、田無南町遺跡旧石器時代 1 が 46.4%（狩猟具 83 点、加工具 96 点）となり、川岸遺跡における狩猟具の割合が若干高い傾向が見られました（第 1 図）。

## 5 狩猟具に残された破損

石器使用痕分析では、北側環状ブロック群出土の台形様石器 5 点とナイフ形石器 13 点に巨視的・微視的痕跡が確認されました（岩瀬 2024）。その内、台形様石器 3 点、ナイフ形石器 12 点に狩猟具として投射・刺突された可能性が高い痕跡である衝撃剥離痕が残されています（第 2 図）。また、南側環状ブロック群出土の資料では、基部加工ナイフ形石器 1 点に衝撃剥離痕が残されています。武蔵野台地の狩猟具について衝撃剥離痕の分析を行った戸塚（2025）によると、台形様石器はⅩ層上部からⅨ層下部にかけて、基部加工ナイフ形石器はⅨ層中・下部、背部加工ナイフ形石器はⅨ層中・上部より出土した資料に多くの指標的衝撃剥離が認められると指摘されています。

本遺跡の北側環状ブロック群から出土した狩猟具では、台形様石器が 37.5%（3/8）、基部加工

ナイフ形石器が 30.8%（8/26）、背部加工ナイフ形石器が 44.4%（4/9）という結果が得られています。そのことから、Ⅸ層下部から中部に良く見られる特徴を示しているかと思えます。

衝撃剥離痕の検出率をみると、実は川岸遺跡の北側環状ブロック群から出土した狩猟具は、非常に高い傾向を示しています。戸塚（2025）が分析した結果によると、台形様石器でも川岸遺跡と同じような平刃のものからは 4.2%、基部加工ナイフ形石器からは 5.4% の検出率という値が得られています。

武蔵野台地で見つかった環状ブロック群から出土した資料を分析した事例は少ないため直接比較をすることは出来ませんが、例えば野水遺跡第 1 地点第 4 文化層から出土した狩猟具では、台形様石器 1 点にのみ衝撃剥離痕が残されていました。ここに川岸遺跡に残された狩猟具の特徴が伺えます。

## 6 まとめ

川岸遺跡の環状ブロック群から出土した狩猟具とそこに残された痕跡に注目し、同時期の傾向と比較したところ、川岸遺跡の狩猟具には、狩猟の痕跡が残されたものが多く含まれていることが明らかになりました。このことから川岸遺跡を残した人々は、遺跡の周辺で狩猟を多く行っていた可能性が考えられます。

川岸遺跡を残した人々が活動していた約 35,000 年前は、海洋酸素同位体ステージ 3（MIS3）後半という温暖期が終わり徐々に氷河期へ向かう、気候の寒冷化が顕著になってきた時期です。川岸遺跡が残された時代は、こうした寒冷化へと向かいつつある気候の中、狩猟を行っていたと推測されます。この時期に日本列島の本州島に生息していた動物は、ナウマンゾウ - ヤベオオツノジカ動物群という動物相で特徴づけられ、その中にはシカやイノシシ、ニホンザル、ヒグマ

といった今の我々にも馴染み深い中小型哺乳類も含まれます（高橋 2007・2015）。骨などの痕跡が遺跡に残されていないためはっきりとは分かりませんが、川岸遺跡の人々はこうした動物を対象として狩猟を行っていたと考えられます。

川岸遺跡の狩猟具に残された破損から分かったことを手掛かりのひとつとして、今後は同時期の環状ブロック群から出土した狩猟具を調べるなど比較研究を行い、投射技術といった旧石器時代の人々が行った狩猟方法などについての研究がより進展することを期待します。

### 引用文献

岩瀬 彬 2018 「6-6 武蔵台遺跡の立川ローム X 層出土の石器群を対象とした使用痕分析」『武蔵台遺跡武蔵国分寺関連遺跡 第 1 分冊 旧石器時代編』東京都埋蔵文化財センター編 320-340 頁

岩瀬 彬 2021 『最終氷期最盛期の石器使用痕研究』同成社

岩瀬 彬 2024 「3. 川岸遺跡出土の旧石器時代資料を対象とした石器使用痕分析」『川岸遺跡 第 7 分冊』東京都埋蔵文化財センター編 33-69 頁

佐野勝宏 2011 「石器に残される狩猟痕跡認定のための指標」『考古学ジャーナル』614: 20-25 頁

鈴木秋平 2024 「赤城山麓を中心とした「狩猟具」の多様性とその含意」『岩宿フォーラム 2024 シンポジウム「ペン先形ナイフ」の再検討』予稿集 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会編 64-75 頁

高橋啓一 2007 「日本列島の鮮新-更新世における陸生哺乳動物相の形成過程」『旧石器研究』3 5-13 頁

高橋啓一 2015 「旧石器時代から縄文時代にかけての動物相の変化」『季刊考古学』132 23-27 頁

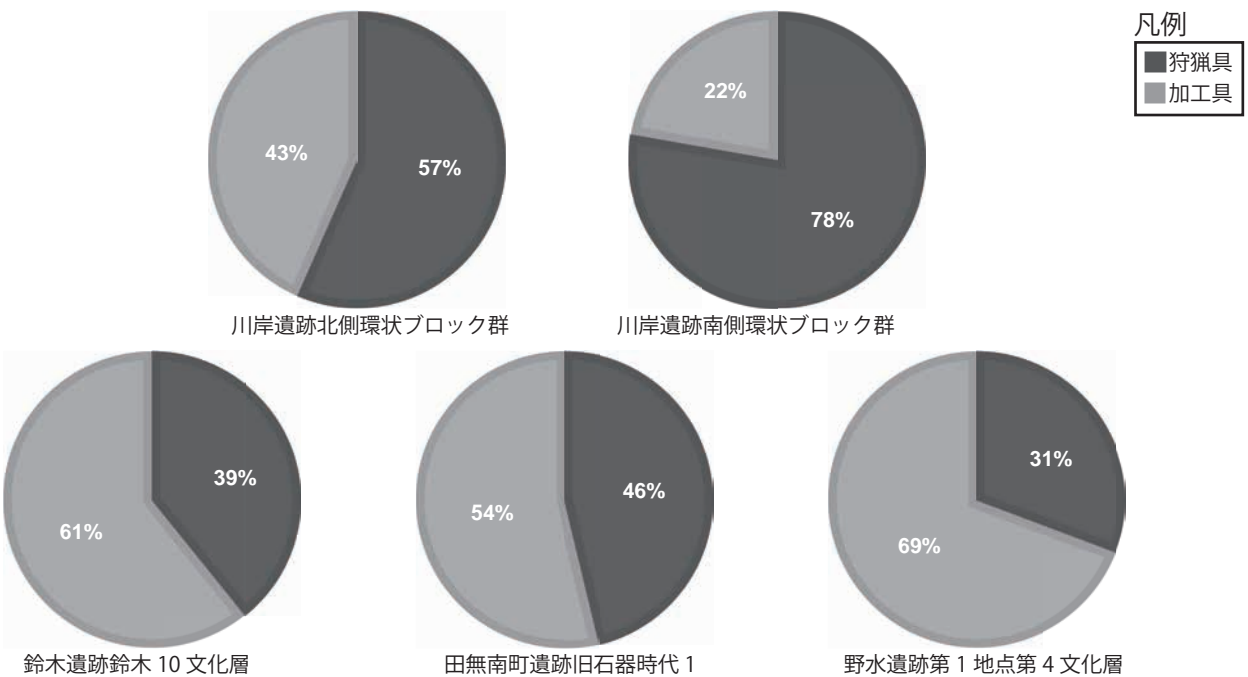
戸塚瞬翼 2025 「後期旧石器時代の関東地方における狩猟具の種類と時期的変遷」『旧石器研究』21 53-73 頁

堀 恭介 2018 「報告 3 前半期石器群の狩猟具と動物相」『シンポジウム東京の旧石器—3 万年前、環境と人々の暮らし—』10-13 頁

御堂島正 2023 「2 比丘尼橋遺跡 C 地点出土石器の痕跡分析」『比丘尼橋遺跡 C 地点第 3 分冊』東京都埋蔵文化財センター編 54-83 頁

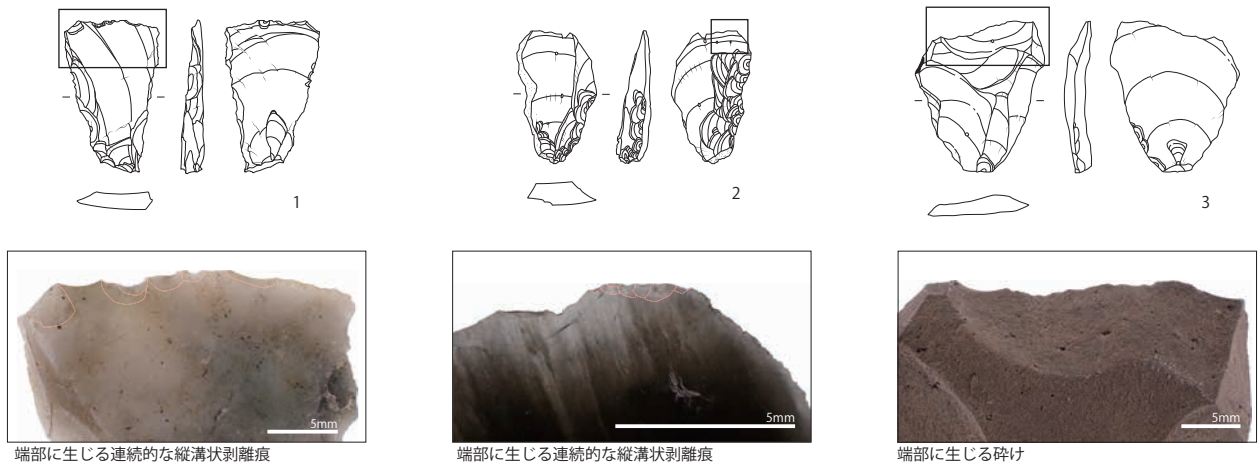
山岡拓也 2019 「東京都府中市武蔵台遺跡から出土した剥片に残された剥離痕」『旧石器研究』15 147-154 頁

※紙面の都合から一部論文と遺跡報告書を割愛した。



第 1 図 IX 層の環状ブロック群出土の道具の割合

台形様石器に残る衝撃剥離痕

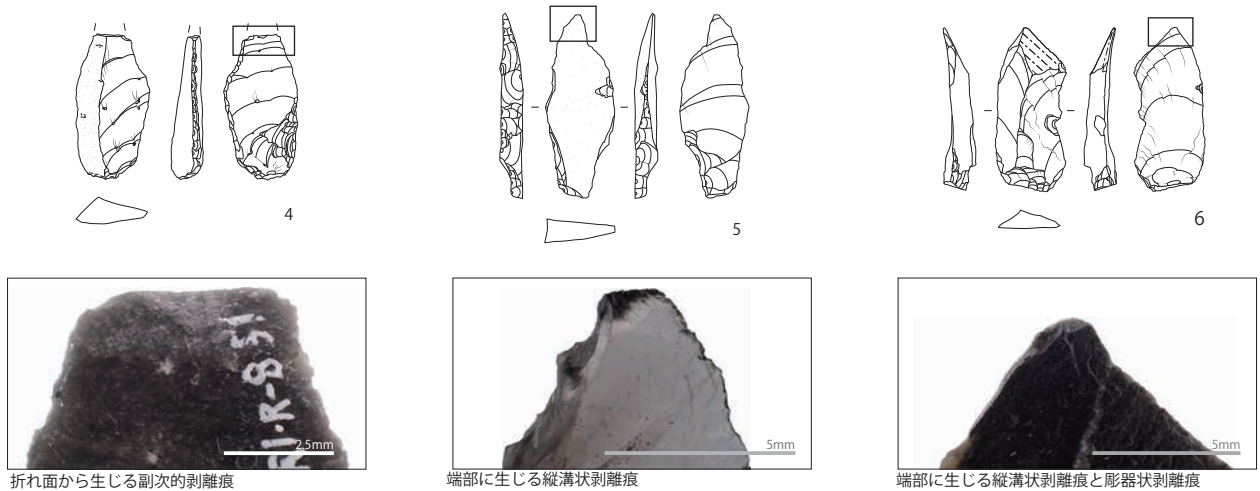


端部に生じる連続的な縦溝状剥離痕

端部に生じる連続的な縦溝状剥離痕

端部に生じる砕け

ナイフ形石器に残る衝撃剥離痕



折れ面から生じる副次的剥離痕

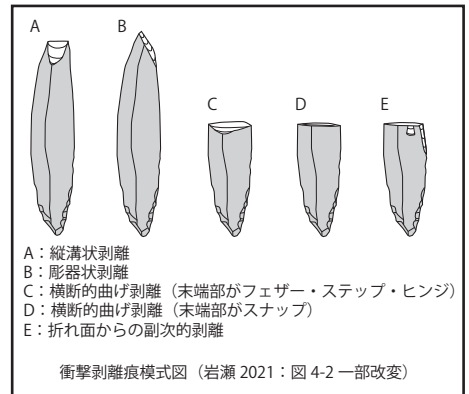
端部に生じる縦溝状剥離痕

端部に生じる縦溝状剥離痕と彫器状剥離痕



端部に生じる縦溝状剥離痕

端部に生じる末端部がフェザーを呈する横断的剥離



第 2 図 川岸遺跡の狩猟具の衝撃剥離痕 (岩瀬 2024 を加工して作成)

---

---

令和7年度東久留米市教育委員会・公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター  
共同事業

## 川岸遺跡講演会及びシンポジウム

令和8年2月7日発行

編集／発行 東久留米市教育委員会

〒203-8555 東京都東久留米市市本町三丁目3番1号

TEL 042-470-7777

公益財団法人 東京都教育支援機構  
東京都埋蔵文化財センター

〒206-0033 東京都多摩市落合一丁目14番2

TEL 042-374-8044

<http://www.tomaibun.jp>

---

---